1985.4

愛鳥教育

NO.15

愛鳥教育研究会

NO. 15 愛鳥教育

1985. 4

目　次

巻頭言　田村活三　3

全国鳥獣保護実績発表大会報告　4

第19回 実績発表大会を審査して　竹下信雄　5

世田谷区立船橋小学校研究主題　石橋寿春　6
「人間性豊かな児童の育成」研究実践経過

研究紹介　下田澄子　10
青森県立三戸高等学校 自然科学部

陳情書の提出について　18

冬期研修会報告／常務理事会報告　20

北海道支部発足　21

夏期研修会の開催について　22
昭和61年度愛鳥週間用ポスター原画募集

愛鳥教育　No. 15

昭和60年 4月20日

発行人　田村活三

発行所　愛鳥教育研究会
住　所　〒150東京都渋谷区宇田川町37—10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内
電　話　東京03(465)8601
郵便振替　東京 2 —92041
制　作　かなえ書房

巻頭言

本年新年号の「私たちの自然」において、連盟会長山階芳麿先生の巻頭のお言葉で〝児童・生徒をはじめ、次代を担う若い諸君への愛鳥教育を充実させることが大切です。若いうちにしっかりした愛鳥教育を受け、自然や生命を大切にする気持ちを培ってこそ、心豊かなうるおいのある人生がひらかれると信じます。今後は文部省と協力してこれを一層推進して、学校教育の中で鳥や人の住む環境を守ってゆく考え方を、普及徹底させていきたいものと思います。〟と申されていらっしゃいます。

私達の愛鳥教育研究会はそのものずばりで、もともと山階会長先生の高いご理想のもとに発足して本年で6年目に入りました。その間連盟におかれましては、各学校へ直接愛鳥教育指導に各地への探鳥会を催したり、また環境庁と共催、文部省・林野庁の後援のもと、全国鳥獣保護実績発表大会及び愛鳥ポスター審査等により、該教育の発展を進められます点有りがたく感謝いたしております。本会は末だ年若く会員も充分でなく、会費にての運営は勿論機関誌愛鳥教育発行に関しては莫大な出費を願っております。どうぞ全国の愛鳥家の皆様、学校関係の皆様、個人・団体沢山ご入会下さるようお願いいたします。

今、時正に日本は厳冬です。北の国からの白鳥、雁・鴨が北海道各地湖沼・東北・北陸殊に伊豆沼新潟の瓢湖その他に、マナ鶴他が山口県八代や鹿児島県出水市に越冬して、全国の愛鳥家や児童生徒の皆様からの落穂や茶がら、パンくず、種などで冬をしのいで北帰を待っていることでしょう。人と野鳥との交流美しいですね。

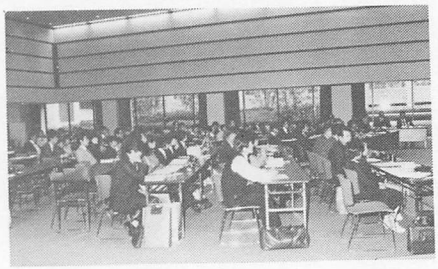
愛鳥教育研究会会長　田村活三

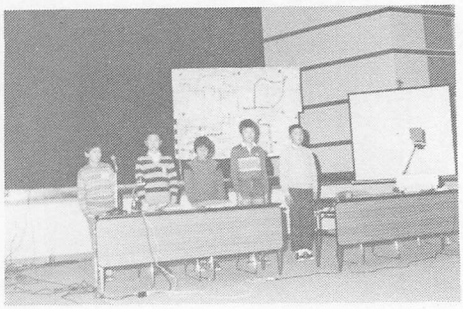
第19回全国鳥獣保護実績発表大会
愛鳥のつどい

全国鳥獣保護実績発表大会・愛鳥のつどいは、去る11月19日、環境庁・講堂において発表校10校の関係者並びに各都道府県鳥獣行政担当者、愛鳥モデル校の教職員など、多数の来場者が集まった中で開催されました。

今回の大会への各都道府県知事から推せんされた応募件数は、15件と近年では最も少ない数となりました。しかしながら、最近の傾向としては、各都道府県共に推せんに当たっては慎重に審査されているようで、所によっては県内で発表大会を開催して最優秀校が県代表として選ばれる、といった県もあり、全体的に水準が高まっていることは事実です。後ろの報告書を見ていただければおわかりのように、さすが上位の賞を受けた学校の活動実績は素晴らしいものです。

どうぞこの愛鳥活動の発表要旨をご参考にしていただき、貴会員の学校及び団体が今後の活動の糧としていただいた上で、将来この大会に出場されますようお願いすると共に、愛鳥教育研究会や日本鳥類保護連盟が何かお手伝いできることがございましたら、ご連絡いただけたら幸いです。





第19回（昭和59年度）全国鳥獣保護実績発表大会
入賞者一覧

環境庁長官賞	東京都	福生市立福生第五小学校
文部大臣奨励賞	熊本県	熊本市立松尾西小学校
〃	神奈川県	秦野市立末広小学校
林野庁長官賞	北海道	平取町立豊糠小中学校
〃	宮城県	県立小牛田農林高等学校林業科クラブ
日本鳥類保護連盟会長賞	愛知県	犬山市立今井小学校
環境庁自然保護局長賞	福岡県	飯塚市立八木山小学校
〃	愛媛県	篠山小中学校組合立篠山中学校
日本鳥類保護連盟会長褒賞	茨城県	桜村立竹園東小学校
〃	山形県	米沢市立三沢東部小学校

第19回　実績発表大会を審査して

日本鳥学会幹事・評議員　　竹下　信雄

今回の大会に都道府県知事から推せんされた団体（いずれも学校）は計15と少なく、その中から書類審査により10校が参加したので、レベルがやや落ちるのではないかと心配された。しかし、それは全く杞憂であった。飛び抜けて優れた発表こそなかったが、全体の水準はなかなか高く、校内の禽舎の飼い鳥が活動の中心と受けとれる、本大会の主旨と相入れないような例はひとつもなかった。

前回に続いて特筆しておくべきことは、愛鳥教育を始めて年月が浅いのに、高い水準に達した学校が多かったことである。これは、ようやく愛鳥教育の理念の理解が進み、かつその方法が確立されてきたことを示している。すなわち、いったん愛鳥教育を始める志さえあれば、試行錯誤を繰り返すことなく、短時日で一定のレベルに容易に達することができる時代になったといえよう。今後とも連盟や愛鳥教育研究会の蓄積を有効に使っていただきたいと思う。その意味で、今までこの大会に参加したことがない学校、あるいは以前大会で表彰を受けた学校の先生方が、会場で熱心にメモをとっていられたことはうれしかった。参加各校では、独自の文集や図鑑などを工夫して作っており、審査の参考資料として拝見し、その出来栄えのすばらしさに驚いたが、それらを相互に交換することも意義深いと考える。

過去数回、審査員席で、あるいは一般席でこの大会を聞き、毎回不満を覚えることがある。それは、鳥獣保護のための生態観察または研究が少なく、かつ内容が不充分なことである。多くの学校や団体に、この分野に挑戦して欲しいというひそかな願いを、私は常々持っている。たとえ既に一般的な法則が分かっているとされるような事柄でも、それは本当なのか否か確かめることでもよい。地方によっては逆の結果が出るかも知れない。ただし、研究というからには、結果の厳密な検討が不可欠である。たとえば、シジュウカラのために白木造りの巣箱と、赤いペンキ塗りの巣箱を架けて、白木造りの巣箱の方が利用されたとしよう。検討が必要というのは、双方の巣箱が架けられた環境の条件は同じだったか、ペンキ塗りの巣箱は足が滑るので嫌われたのではないか等々を考察し、必要ならさらに実験を繰り返すことが求められるのであって、赤い巣箱は使われない、という結論に飛びついては困るのである。従来、ややもするとこのような研究発表が多かった。新しい知識をもたらす研究は、たとえそれが小さなことであっても、鳥獣の保護に大きく寄与する可能性がある。新しい成果を期待できる分野であることを強調したい。

今回の実績発表大会では、スライド映写機やＯＨＰ（オーバー・ヘッド・プロジェクター）を中心に構成した学校が大部分を占めた。制限時間内に多くを伝えるため、スクリーンを２台駆使した例も多かった。一方で、用意した原稿を読み上げただけの学校もあった。発表大会であるから、当然発表の巧拙も審査の対象になるが、それはあくまで日ごろの成果が伝えられているか、また発表者が事の本質をよく理解しているかが問題にされるのである。発表に、より工夫を凝らしたからといって、高く評価される訳ではない。この大会だけを目的に、発表の準備に多くの時間を費やす必要はない。今回の大会の発表の形式などは、おおむね妥当な範囲にあったといえよう。原稿の素読にも好感を持った。発表者は、ほとんどが児童生徒のみ。先生方が一部を担当した学校もあった。先生だけの発表もあり得る訳で、大会の初期にはそのような形が多かったという。今も、この形を否定、あるいは低く評価することはないことを確認しておきたい。各校とも制限時間内に発表を終えたことは気持ちよかった。

（「私たちの自然」No.279より転載）

思いやりの心を持って行動できる子どもを育てる

愛鳥教育研究会常務理事／世田谷区立船橋小学校教諭
石橋　寿春

1、本校の概要と愛鳥活動のあゆみ

児童数800名、世田谷区のほぼ中央に位置し、以前は（20年前）畑地だったものが住宅街に生まれ変わり、比較的緑に恵まれていると言えども、自然環境は悪い。隣接して環状８号線が通り、排気ガス公害、騒音に悩まされている。そのような中にあって、巣箱作りの活動などが認められ、都愛鳥モデル校に指定される。当時２校が指定を受けたが、世田谷区の環境行政のバックアップを受け現在では７校に至っている。

昭和51年度

- ３月　愛鳥モデル校指定を受ける。

昭和52年度

- 愛鳥モデル校教育研究推進委員会発足となり、愛鳥活動年間計画を作成し、野鳥クラブ・野鳥委員会を中心に巣箱・給餌・給水等の活動を始める。
- 展覧会では愛鳥コーナーを設置し、広くＰＴＡにも呼びかける。

昭和53年度

- 教育課程への位置づけが行われ、めあて、組織、活動内容が教育計画の中に示される。
- 愛鳥新聞がクラブ・委員会ばかりでなく、全学級で発行され始める。

昭和54年度

- 全校で取り組まれた愛鳥カード（野鳥観察カード）の形式が変更され、書きやすいものになる。
- ５月、第33回「全国野鳥保護のつどい」に参加し、鈴木都知事より「知事賞」をいただき、児童が「誓いのことば」をのべる。
- 展覧会で愛鳥コーナー設置。

昭和55年度

- 愛鳥放送が朝・昼・帰りに流され、鳥の声や愛鳥カード、鳥の説明などをする。
- 文集「ムクドリ」発行。
- 月別のめあて（観察の観点）を決める。
- 愛鳥集会活動を年３回実施する。

昭和56年度

- 都民のバードウィーク展で愛鳥劇の発表。
- 10月にＰＴＡとバードカービング講習会を催す。
- 11月より毎週金曜日の早朝探鳥会を始める。

昭和57年度

- 校内重点研究主題「豊かな人間性を育てる指導法の研究」―愛鳥と算数を通して―
- 学校裁量時間に「愛鳥タイム」を設定し、月１回全校活動として取り組みを始める。

昭和58年度

- 主題は変更せず、子ども達の豊かな情操面を育てる意味から、てだてを愛鳥だけにしぼって愛鳥活動の研究を深める。
- 11月、全国鳥獣保護実績発表大会に参加し、環境庁長官賞を受賞する。

昭和59年度

- 昭和59・60年度世田谷区研究奨励校に指定される。研究主題を「人間性豊かな児童の育成」とする。

2、昭和59年度研究経過の概要

(1)研究主題及び年間研究計画構想

①豊かな人間性を育てる指導法(届出仮主題)
《愛鳥活動を通して》

- 教育目標の検討と実態調査から主題についての再検討をする。
- 実態調査は目標検討委員会と合同で行う。

②年間研究構想

●昭和59年

1　主題の検討
2　教師、父母の児童像に対する実態調査
3　研究組織を編成する
4　愛鳥タイムの計画による活動
5　学習指導教材配列表に基づく研究授業の実施
6　反省と次年度の計画をたてる

●昭和60年

1　研究授業の実施
2　愛鳥タイムの計画に基づく実践
3　研究のまとめ
4　研究発表

(2)　学校の教育目標及び研究のねらい検討のための実態調査

①知・情・意・体を現行の教育目標から14項目選びアンケートをとる

②調査の結果

○がまん強く最後までやりぬく（1位）
○相手の立場や気持ちを考え行動できる（2位）

今後、学校や家庭で特に力を入れて指導していきたいと思う項目では、父母も教師も順位ほぼ一致。

従って主題の設定にあたっては、この結果を参考資料としていく。

(3)　研究主題の再検討

主題「人間 性豊かな児童の育成」

副題「思いやりの心を持って行動できる子どもを育てる」《愛鳥教育を通して》

●愛鳥教育「弱いものをいたわり、人間をもふくめた動植物の愛護の心情を養う」という精神を重視し、特に思いやりの心を全領域を通して培っていく。

(4)　研究を進める実践の場

●教科・道徳・特活・裁量時間の全領域とする。

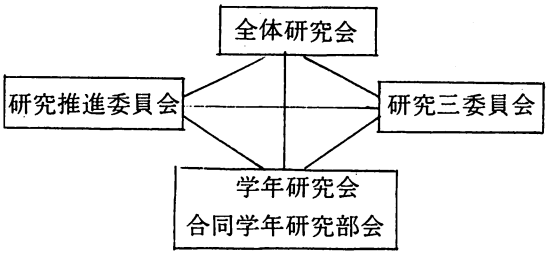
●愛鳥教育を全教育活動の中に意図的、計画的に実践し評価し、思いやりの心を育てる。

●教科（国語、理科）、道徳、特活（集会、学級指導、行事、委員会、クラブ活動）、裁量の時間（愛鳥タイム）、その他（愛鳥カード、愛鳥放送、探鳥会）。

(5)　研究組織

●学年研究会、合同学年研究会は、直接児童の指導にかかわるので、話し合いの場として活かしていく。

●愛鳥活動、学習計画、環境整備の研究三委員会は、学年及び合同学年研究部会を援助していく。



●研究三委員会

①愛鳥活動委員会

○愛鳥新聞、愛鳥カード、放送、探鳥会、委員会及びクラブ活動

②学習計画委員会

○指導資料の検討、指導案調整、授業記録、必要に応じての実態調査、資料作成

③環境整備委員会

○研究を進めるために必要な人的・物的環境の整備、愛鳥環境整備

(6)　研究主題の具体化のために

（研究にかかわる学年目標）

学校の教育目標	思いやりのある子ども	（学年目標）相手を理解する	
		・低学年	身近な動植物に親しむ 友だちと仲よくする
		・中学年	動植物の性質を知り世話をする みんなで助けあう
		・高学年	動植物を大切にし、環境を守る 相手の立場に立って行動する

(7) 研究授業計画

- 教科、道徳、特活（裁量の時間）から研究授業の計画をたてる。
- どの領域から授業を行うかは学年で検討し、合同学年会でも話し合う。
- 学習指導教材配列表（58年度作成）にもとづき、研究授業学年を月別に実施した。

1年	愛鳥タイム	鳥と仲よしになろう
2年	道徳	わたしのヤマバト
3年	国語	百ぱのつる
4年	国語	アルプスのキジ
5年	道徳	ノア作戦
6年	道徳	野性のさけび声

- 各学年での課題

1年（愛鳥タイム）

身近にいる鳥に親しむ。

えさやりを通して鳥に近づくことにより、鳥に対する思いやりの心を育て、さらに他のものにまで思いやりの心を広げる。

2年（道徳）

愛鳥活動の対象として動植物を見ているが、それはまた生き物として見るよりも単なる興味の対象でしかないと思われる。

それを発達段階に合わせて、自分と同じ生き物として見る目を育てるためにこの主題に取り組んだ。

3年（国語）

「百ぱのつる」の文学作品は、即、思いやりの心を育てることを主題にしている。ここで育った思いやりの素地が、愛鳥教育にも生かせるのではないだろうか。

4年（国語）

思いやりの心を育てるには、発達段階を考慮した副読本の活用を通して、さらに深く思いやりの心を育てることができるのではないだろうか。

5年（道徳）

「思いやりの心」の前段階として、相手をよく知ることの必要性をポイントとして授業を組み立てたが、今まで行われてきた愛鳥活動が、児童にどのような心情を培ってきたのか冷静に見直す必要があるのではないか。

6年（道徳）

道徳の徳目として、動植物愛護、自然愛護があげられている。徳目自体は新しいものであり、教材等から見て、本校の特性を生かした指導を進めるべきではないだろうか。

3、愛鳥教育の概念について

船橋小ではこの研究を進めていく中で、果たして愛鳥教育というのはどういうことなのか、学校教育の中で行っていく場合、学校教育の目標との関係をどう位置づけていく必要があるのか。あるいは、愛鳥活動と愛鳥教育との違いをどうとらえ

なければならないのか、など様々な疑問の中で、仮説を含めて次のように考えてみた。

(1) 自然保護運動……なぜ愛鳥か……

高度経済成長の影響で、昭和30年代後半から自然破壊・公害等が社会的に大きな問題として提起され始めた。これを機に、自然愛護・自然保護運動が各地から、各団体によって起こされてきた。鳥獣保護運動もその一環として台頭してきたのである。

特に愛鳥に関する運動は、鳥はどこにでもいる、人間に直接害を与えることなく親しみやすい、という特性を生かし、自然保護の精神の普及活動の糸口としたものである。

(2)愛鳥活動とは

自然保護思想普及のための活動として始められたものである。従って環境庁を代表とする環境保護に関する機関や、団体の応援や支持によって進められてきた。

そこで、具体的な活動内容としては、

① 野鳥の生態を知る活動
　　調査、観察、親しむ等の活動
② 野鳥の保護活動
　　生態に応じた保護活動
③ 普及活動
　　自然保護思想の普及

である。これらの活動から教育的価値を抽出し、計画的、意図的に教育過程に位置づけていけば十分効果をねらえるものである。

さらに、計画・実施・評価が全校的に行われるよう推進していくことが望まれる。

(3) 船橋小の愛鳥教育

教育の目的は、社会の一員としての人間形成である。人間性豊かな児童の育成である。そこで、愛鳥活動を人間形成の手段として高めていく必要がある。本校では教育目標やその現状、さらに父母の要望などを考える中で、人間関係の醸成をねらいとして愛鳥教育を考えるに至って来ている。人間関係を深めるための最も教育的価値の高い要素は「相手の理解」である。野鳥の保護活動は、鳥の生態をよく知った上で行われなければ成功しない。相手の理解はまた鳥だけではなく、その他の動植物の世話や保護に欠かせない肝要な基盤である。従ってこれは、人間関係を深め好ましい姿をつくりあげるためにも、そのまま活かせるものである。本校では具体的な研究の目標を、「思いやりの心を持って行動できる子どもを育てる」とし、次の様な活動を基本として、研究を深めていこうと考えている。

①野鳥の生態を知り、適切な保護活動
　　《愛鳥活動》
②相手の性質を理解し、適切な世話をする
　　《動植物の愛護》
③相手の理解に努め、相手の立場を考えて行動する　　《人間関係の醸成》

以上が、本校での現在までの研究経過であるが、まだ、教育課程への位置づけや、教育目標との関係がしっかりと定まっているとは言えないので、様々なご意見やご批判をあおぎご指導いただきたいと考えています。この２月には福生市立福生第五小学校での発表もあり、愛鳥教育が全国各地で、子ども達の情操を高め、人間形成を助ける手段として研究が深まり、愛鳥の評価が高まっていくことを願っている次第です。

なお本校は今年昭和60年度11月に研究発表会を開く予定となっております。

研究紹介

青森県立三戸高等学校自然科学部部誌

PAULOWNIA（パウロニア）から愛鳥活動について紹介

はじめに（今までの研究紹介について）

多くの学校が、地域や学校の実態に立脚した愛鳥活動を展開されるよう、そしてその時、少しでもお役にたつことができたらと願い、また立派な業績をつまれている方々のようすを、できるだけ多くの方々にお伝えしなければもったいないと考え、回を重ねてまいりました。しかしこの間、私自身の野鳥に対する知識や経験が不十分で、その上誌面の関係などもありまして、十分な伝達ができませんでしたことを、実践された方々にも、読者の方々にも深くおわび申し上げます。

かえりみますと、最初、富山県が中心となって各学校の子どもたちが行った、ツバメの調査を取り上げさせていただき、次に小学校について、小規模校・大規模校、自然環境に恵まれた学校、自然に恵まれない都会の学校、というような観点でご紹介し、中学校については、規約をつくることによって愛鳥活動の運営を明確にして成果をあげた学校、生徒会が積極的に地域の自然に働きかけてすばらしい活動を展開した学校、クラブ活動の中で特に野鳥の観察に取り組んでいる学校などを書かせていただきました。まだまだ多くの学校の多彩な活動につきまして、ご報告したいと思っておりますが、一応一つのまとまりをつけるということもございますので、今回は高等学校についてご紹介させていただきます。

1、ＰＡＵＬＯＷＮＩＡというのは（註は筆者）

註　ＰＡＵＬＯＷＮＩＡは、三戸高校の自然科学部の部誌で、1983年には15号となっています。年１回の発行で、地域の動植物について広く、多くの生徒によって書かれ、250頁をこえる立派な印刷物です。今回は1982年の14号と、上記15号に掲載されているものについてご紹介しますが、まず扉に次のように書かれています。

◎　ＰＡＵＬＯＷＮＩＡとは、キリの学名からとったものである。この木を切れば、すみやかに芽を出して、成長が早いのでキリの名があると言う。

無限に伸びる菊花弁とともに燃える桐は、わが校の校章でもある。…中略…まず「真理の探究に情熱をもやせ」ということを念頭に、またクラブ員の心の和らぎと調和、ほのぼのした心の輝きを念頭して、部誌をＰＡＵＬＯＷＮＩＡと名付ける。(◎印、○印はパウロニアの文)

2、ＰＡＵＬＯＷＮＩＡの内容と指導者

註　パウロニアの内容を目次によって紹介します。以下は、1982年版14号のものです。

◎①郷土の生物写真集12…顧問/ 向山満(口絵)・1

註　目次のあと１頁より20頁まで、向山先生撮影の写真が40枚掲載されています。内容は、ホンシュウトガリネズミ２枚、ニホンキクガシラコウモリ４枚、ニホンウサギコウモリ４枚、ニホンテングコウモリ４枚、ニホンコテングコウモリ４枚、ヒガイ１枚、ニゴイ１枚、タビラ１枚、ギバチ１枚、クラブ活動の場面16枚、活動の様子を掲載した新聞８種１枚、賞状６枚・楯３枚を写した写真１枚で、いずれも非常に鮮明に表現され、例えば種類によるコウモリの顔つきの違いなど実に楽しく、またクラブ活動の場面からは、多彩な活躍ぶり、労苦、協力、あたたかみなどが、にじみでています。

これらを撮影された向山満先生は、新任でこの三戸高校に昭和40年赴任され、以来この自然科学部顧問として今日に至っているということです。パウロニア15号に、山田校長先生は顧問とこの自然科学部について、次のように書かれています。

◎　「私は当校に赴任して５年、パウロニアと1/3の付き合いをしたが、日頃の向山・杉本先生の研鑽を見るにつけ、この顧問のもと、部員はいい先生に恵まれていると思う。…（中略）…

向山先生は「ヒラメ」と呼ばれて、三戸高校の名物先生として新聞にも取り上げられている変わり者である。自分の子供よりコウモリが大好きで、コウモリと聞けば、いつでも、どこでも

夜も昼も飛び回って歩く。また鈴木善幸こと杉本先生も、負けない程の化学気違い、まさしく縁の下の力持ちである。生徒は教師の姿を見て成長するという。本校の自然科学部の部員たちが、自然から何かを学び、自然の摂理の何たるかに触れ得たのも、この顧問あってのことである。

この顧問と部員の一体となったフィールドワークは、三戸町のシンボル城山を、単なる観光地としてでなく、学術的に貴重な場所として全国に紹介してくれたのである。三戸町の鳥コノハズクの生息地として、市街地の真中にある野鳥の生息地として、日夜欠かすことなく観察保護を続け、昨年は見事に、日本学生科学賞で3位となったが、その研究テーマは、桜の名所城山に生息する野鳥ウソの生態研究であった。桜の芽を食べる犯人がウソだという大方の考えに疑問を持ち、科学的な解明に真正面から取り組みその成果を認められたのである。また伝統というものはまことに恐ろしいもので、先輩から後輩へと確実に受け継がれてきた研究姿勢が、この地方のみならず、全国的に高く評価され、今後の研究が注目されているのである。(以下略)

◎②クラブ活動の思い出1981…… 口絵・12
◎③巻頭言…… 校長/ 山田静・1
◎④発刊によせて…… 顧問/ 向山満・2

今年も1ページをうめる時期がやってきた。そして、1年間は短いとつくづく思い知らされている。…中略…1年間を振り返ってみて、まとまった仕事と言えば何が残るだろう。一応ウソの生態研究は、全員で苦労した努力が報いられる結果になったようだ。……ここでいい研究をすれば、相当の評価をしてもらえるという教訓を得たわけだが、私たちとして忘れてならないことがある。研究としてまとまりのある仕事だけを追求してはならないことである。コンクールに応募できる内容に程遠いのだが、日常の活動での小さな発見を大切にしたいものだ。例えば、モリアオガエルの樹上産卵池の発見、…比久尼坂のトウヨウヒナコウモリの繁殖コロニーの増加確認、コノハズクの営巣樹洞の発見、オオムラサキのいるエゾエノキの確認など、三戸地方の自然の中での小さな記録を正確に残せるような活動を続けたいのだ。フィールドワークに雑多な分野があってもよいと考える。

……後略……

註　この向山先生の感想に私は心を打たれました。一生を自然科学の研究にゆだねている人が幾人も身近にいますが、苦労が他の人にわかってもらえる部分はほんのわずかで、時には、はたからみると、何を考えているかわからないと思われる程、いわゆる計算のあわない生活が展開されています。しかし事実を追求し、筋道を求めて、日夜あくことのない研究が続けられているのです。近代科学は、このような地味な営みの上に華開いたのであって、数多くの研究者の徒労をいとわない追究の上に成り立っていると言えると思います。

従ってこの向山先生のお考えは、高校段階で、成果多いもののみを追うのでなく、本来の研究の姿を、身をもって子ども達に体験させているということで立派なことと考えます。

そして同時に、自由な生徒の発想を可能にして、個人的にやりたいことがやれるという余地のあることは、個性の伸張と意欲的に取り組める意味ですばらしいと思います。無論、組織は目標をかかげて、全員が協力して追究していくという体制を大切にし、常にそれがなくてはいけないと思いますが、あらゆる発達段階にいる、しかも興味も思いつきの段階の生徒もいる場合、いろいろな出発点から自然探究の面白さをわからせていける内容があるのがよいのではと考えます。研究内容に幅があることによって、明日の課題がその中に準備されるという情況を生み出すことが可能になるでしょうし、特に高校の研究が、その地域の自然を守る監視者になり得ているということを、いろいろな意味で貴重なことと思いました。

◎⑤いしずえ……顧問/ 杉本均・3

ＰＡＵＬＯＷＮＩＡも、14が発刊されることになった。……各班とも新入部員が多かったせいか、２・３年生が張り切って後輩の指導にあたっていた。…中略…先日、自然保護の会の集会があって出かけてみたら、三高の自然科学部のＯＢがたくさん来ていて、「ウソの生態研究」の研究が全国３位になったことを聞いて涙ぐんでいた。城山の野鳥の観察の研究を始めた頃は、理科研究発表大会に参加しても、なかなか入賞できずただむなしさを感じたとＯＢのひとりは語ってくれた。パウロニア１号によると、道前から歩いて夏坂、さらに花木に行き、遠瀬からバスで帰ってきたと書いてあったから、かなりの距離をＯＢ達は歩いたと感心する。…中略…

私も高校時代に地学部に属し、気象観測をやり、日曜日の当番の時、たった10分間のために１時間も時間をかけて、寒風吹く八戸の白銀台に行かなければならないのに疑問を感じたときもあったが、自分がやらなければならないという使命感だけでやっていたような気がする。……それが数年後、そのデータが八戸の公害調査に利用できたと聞いてとてもうれしかった。

本校の活動の主流は、フィールドワークであるので楽しいことより、つらいことの方が多いと思う。先輩たちが築いてくれた「いしずえ」の上にさらに新しい事実や研究を積み重ねて、自分たちがまた新しい「いしずえ」を築いていくんだという自覚を持って、日々活動に励んでほしい。

◎⑥今年の活動から……部長/ 佐藤昭弘・4

今年の活動は、毎年恒例になっているニューイヤーカウントから始まった。冬季において生物班は、「ウソ調査」を１日も休むことなく行った。何度も何度もみんなで集まり、ウソについての学習会を行った。調査不足のところはお互いに協力して補った。腰まで雪が積もっている時でも、全力をあげて調査を行った。…中略…

青森県児童生徒理科研究発表大会で、生物班が１位、化学班が２位、気象班が２、３位とそれぞれ上位に入賞し、読売新聞主催の学生科学賞の審査会において、生物班が最優秀賞、気象班、化学班がそれぞれ佳作を受賞することができた。これら数々の賞を受賞できたわけであるが、この原稿ができるまでには悲劇がいくらもあった。また原稿を書いてみて思ったことは、私ごとであるかもしれないが、研究論文を書くむずかしさと、その原稿をすみずみまで見直し最後までやりなおすことの重要性を知った。これからの活動にあたって、もっともっと部員がお互いに協力し合い、一致団結して最後まで責任を持ち、よりよい成果を上げるよう努力したい。そしてこれからも我々の郷土の自然を続けて調査していきたい。…後略…

◎⑦城山公園の生物1981……4

○(1)哺乳類……哺乳類班/ 大田孝行他・5

○(2)野鳥……7

○　①野鳥目録……堀内隆雄・7

今年、城山公園で確認された野鳥は、13目26科54種であった。ここにあげている野鳥は、毎週土曜日に行っている定例調査と、野鳥班で行っている巡回の時確認されたものである。目録の種名・配列は日本鳥学会発表の「日本鳥類目録改訂５版」によった。

註　誌面の関係で以下、目・科名をはずして記載します。

ゴイサギ、オシドリ、カルガモ、トビ、ハヤブサ、キジ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、ホトトギス、コノハズク、ヨタカ、アマツバメ、ヤマセミ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、イワツバメ、キセキレイ、セグロセキレイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、モズ、トラツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、オオヨシキリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、コガラ、ヒガラ、ヤマガ

ラ、シジュウカラ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス。

1979年より目録を作成しているが、今年の調査で新たに確認された野鳥は、カルガモ・ホトトギス・セグロセキレイ・サンショウクイ・シロハラ・メボソムシクイ・キビタキ・コサメビタキ・ヤマガラの9種である。…中略…

過去2年間のデータと比べると、15種の野鳥の確認ができなかった。また、3年間で13目31科69種の野鳥が確認されたことになる。

○ ②巣箱繁殖利用状況調査…馬場富美子・8

註 巣箱は、シジュウカラ用100個（No.1～100）コムクドリ用50個（No.101～150）、ムクドリ用50個（No.151～200）、コノハズク用4個（No.201～204）を取り付け、調査日は、4月・(16)、18、25、27、28、5月・5、6、(8)、16、23、30、6月・(6)、20、7月・(11)、29、8月・7、(19)、29、9月・12日に全巣箱を行ったということです。（ ）内は、夜間巣箱調査とのことです。なお一部の巣箱は、5月・11、13、14、22、27、6月・2、10、16、24、27、7月・1、8、18、27日に行われています。

結果は表2のように整理されています。

○ ③夜間巣箱調査……谷内淑子・13

○ ④ウソの生態研究……佐藤昭弘他・18

三戸高校の東方にある城山公園は桜の名所として知られていて、毎年多くの花見客が訪れる。ところが、毎年冬になるとウソが渡来し、桜の花芽を食べている。最近、ウソが桜の花芽を食べることにより、桜の開花数が大幅に減少するという問題が生まれた（1979年2月5日、東奥日報記事他）。ウソが滞在している間、公園内の地面にはウソが採食した後の桜の花芽の一部が散乱し、ウソが食べたことがわかる。その量は、人によって大きく見方が違うので、どの程度影響を与えているかについて定説がなかった。文献を調べたが具体的な調査結果が見あたらなかった。そこで冬期間のウソの行動と食芽量及び公園の桜の花芽数について調べた。その結果、ウソの食べる花芽数と現存する花芽数の関係をつかむことができた。ここでは、これらの結果を報告する。

ウソには、ウソとベニバラウソとアカウソの3亜種がある。城山公園にはウソと少数のアカウソが渡来する。ウソの♂は体全体が灰色で首の部分がバラ色であり、アカウソの♂は体全体にバラ色を帯びていてはっきりその違いがわかる。また♀はウソ、アカウソとも体全体が灰色

表2、野鳥活動詳報 1、シジュウカラ

項目No.	巣作り期間	産卵開始日	全卵数	被害卵数	フ化日	フ化雛＋卵	全雛数	無精雛数	巣立ち日（範囲）	全巣立ち数	被害雛数	死亡雛数	備考
1	6.20～7.9	7.10	6	0	—	—	0	0	—	0	0	0	営巣 放棄
2	4.10～4.21	4.22	10	0	5.13	5.14 (8＋2)	8	2		0	0	8	5.14～5.16 営巣放棄
6	4.10～4.20	4.21	8	8	—	—	0	0	—	0	0	0	盗難
8	5.16～5.20	5.21	7	0	6.6～6.10	6.10 (7＋0)	7	0	6.24～6.27	7	0	0	
10	6.20～7.5	6.20～7.5	7	0	7.18～7.27	7.27 (7＋0)	7	0	7.29～8.7	6	0	1	7.27～7.29 死亡
192	6.20～7.11	6.20～7.11	4	0	—	—	0	0	—	0	0	0	営巣放棄
合計			260	32			128	12		96	17	15	

・表中のNo.は巣箱のNo.

・表中の産卵開始日は、1日1個ずつ産卵するものとする。産卵逆算してある。

・ここでの利用は、産卵まで進んだ場合のみ対象としている。

で両者を野外では識別できなかった。なお花芽の熱量測定を引き受けてくださった、東北女子大学の葛西文造教授に厚く御礼申し上げます。

Ⅰ　調査方法(以下文章の一部を簡略化します)

1、調査場所　城山公園及び三戸校校庭

公園内には桜が多いが、ほとんどソメイヨシノである。以下他品種も総称してサクラとする。サクラは道の両側に沿って公園全体に植樹されている。サクラの花芽数の測定は、三戸高校校庭に植樹されているサクラを使用した。

2、調査日程

1980年の冬は予備調査を行い、「ウソの生態調査予報」を出した。我々は年間を通じて1週間に1度以上城山公園を巡回調査（定例調査）しているが、1980年の12月21日にウソの渡来を初めて確認できた。その後は1981年4月10日まで、ほとんど毎日調査を行った。1回の調査時間は少なくて30分、多い時は泊り込んで（1月12日～13日、2月10日～11日、2月21日～22日、3月14日～15日）翌日のウソが見えなくなるまで調査した。

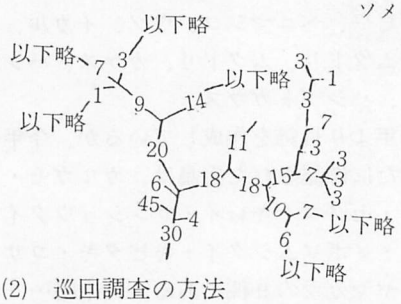
3、記録方法と計算方法

(1)　サクラの本数と花芽の数

三戸校校庭の、胸高直径30～60cmのソメイヨシノ7本を使って、枝の直径と花芽数の関係を求めた。サクラの下部、中部、上部の各場所、また日当りのよい所、悪い所より、1cm～10cmの枝を任意に数本ないし数十本選び、それぞれについている花芽数を野外で直接カウントした。その際には、カウンターを用い、葉芽は数えないよう注意した。10cm以上の大きな枝については、10cm以下の枝が何本ついているか調べ図のようなサクラの分解図を作った。

最終的には胸高直径と花芽数との関係を求め、次に城山全体のサクラの総数と、それぞれ胸高直径を調べ、これから城山全体の花芽数を算出した。

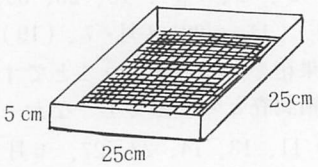
サクラの木の分解図（1981年3月三戸高校のソメイヨシノ）



(2)　巡回調査の方法

3～4名が1組となり城山公園を1日1回巡回した。その際ウソの群れの構成と、時間によっては1分毎の食芽数を観察記録した。群れの構成では羽数、雌雄、アカウソの数、時間、場所を記録した。また公園全体に図のコドラードを、定置コドラードとして25箇配置し、この中に落ちた花芽数を本体と鱗片に分けて記録した。（1月7日～4月4日まで）（コドラードの中に花芽の一部が落ちていればウソによって食べられたことにした。

コドラード



4回の泊りがけの調査では、朝5時30分から調査を始め、ウソがいなくなるまで行動を交代で追跡した。調査にはプロミナー（25×）と双眼鏡を使用した。…以下略…

(3)　食芽数の計算方法

①食芽カウントによる方法

1分毎の食べる花芽数をカウントした。1日分全部を集計して、各調査日の1分毎の平均食芽数に1日の活動時間をかけて、1羽あたり1日の食芽量とした。これに各月の平均羽数をかけ群全体の食芽数とした。

②コドラードによる方法

前夜雪が降り翌日日中降らなかった夕方は、その日食べられた分のサクラの散乱面積がわ

かる。散乱区域内に不定コドラード（定置コドラードと同じ大きさ）を数個置き、その中の平均芽数から1㎡の芽数を出し、さらに散乱面積をかけて総散乱数を求めた。…中略…そしてその日の定置コドラード内の花芽数との比を求めた。

③サクラの花の熱量による方法（説明略）

(4) 滞在日数

巡回調査で、ウソを目撃した日と、コドラード内に花芽があった日を、滞在日数とした。大雪で調査できなかった日は、前後の状況から判断した。

II 結果と考察

1、食べ方

…略… 花芽のつくりは、8～10枚の茶色の鱗片と、3～5枚の緑色の鱗片と綿毛のようなもので包まれている。さらに中心部には花になる部分が3～6個ある。しかし4個のものが圧倒的に多い。ウソはこの花の部分だけを食べる。食べられたあとの花芽は、本体と数個の鱗片に分かれて散乱している。本体の部分は中心部の花になる部分がなくなっている。…略…ウソが1個のサクラの花芽を1回つついただけで食べる時と、2回以上つついてから食べる時があることがわかった。…以下略…

2、城山公園全体のサクラの本数と花芽の数

サクラの総数 744本

総花芽数 57,421,000 （表・説明 略）

3、冬期間のウソの行動

(1) 渡来数と滞在日数について（表 略）

1980年12月21日に♂2♀4計6羽のウソを初認した。その後ウソの数は増え続け、1月と2月は最大になり、最高28羽まで増加した。3月になると数は減り、4月に確認はまれになる。群れの中にはアカウソも2～3羽確認できた。なおウソは12月21日から4月4日までの間はほとんど毎日確認されている。

(2) 活動時間について（表 略）

ウソが城山公園に現れるのは、朝6時から6時30分の間で、いなくなるのは16時30分から17時の間である。平均621分、約10.3時間の活動時間となる。

(3) 行動について（図 略）

ウソの行動は一見気まぐれ的であるが、観察してみると、1月は公園の東北部を回遊し、2月になると中心部を回遊して、3月には南西部を回遊するように移動していることを示す。ウソが公園内を広く回遊するのでなく、せまい部分を終日移動していることを示す。そして近くの花芽が少なくなると、となりのサクラに移動して食べる。

4、食芽数

(1)食芽カウント法から求めた一冬の食芽数

月	毎分食芽数	毎日食芽数	毎月食芽数	毎月総食芽数
12	14	8,700	78,000	680,000
1	14	8,700	270,000	3,400,000
2	12	7,500	210,000	3,000,000
3	10	6,200	160,000	1,600,000
	10	6,200	6,200	50,000
				8,730,000

毎分食芽数、毎日食芽数は1羽あたりの数で毎月総食芽数は群全体の数である。

(2)コドラード法から求めた一冬の食芽数（図略）

総散乱数と定置コドラード内の本体数の比較

月 日	散乱総面積（㎡）	不定コドラード1個体の本体数	A 総散乱芽数（個）	B定置コドラード内の本体数	比 A／B
1月12日	340	6.6	36,000	6	6,000
2月2日	300	1.4	6,700	4	1,700
2月11日	2,800	1.2	54,000	21	2,600
				平均	3,400

公園全体の散乱芽数は、定置コドラード内本体数の合計の約3,400倍ということになる。

1月7日～4月4日の間の定置コドラード内の本体の合計は1,398個なので、3,400倍すると4,740,000個となる。これには12月分のコドラードを調べられなかった分は入っていない。調べられなかった日は、12月の9日分と1月の6日分、2月の4日分のことである。この末測定分（食芽カウントから求めた）の約1,750,000個を追加すると6,490,000個となる。

(3)サクラの花の熱量から求めた一冬の食芽数

（数表・説明　略）

5,540,000～6,390,000個で、コドラードで求めた6,490,000個と近い値になる。

(4)城山公園全体のサクラの花芽数と食芽数の関係

1981年冬に、城山公園で、ウソの群れは全体で少なくみて4,260,000個、多くみて 8,700,000個のサクラの芽を食べたことになる。前の(1)と(2)と(3)の考察から総合的に考えて私達は、約6,000,000個の花芽を食べたと推定している。

城山公園全体の花芽数は約57,420,000個なので、ウソによって食べられた割合は、少なくて7.4%、多くて15.2%となり推定で約10%となる。サクラの開花様式から考えて、この程度の食芽数では、全体的にみて花見にそれ程影響がないものと思われる。ただウソが食べる部分が木の上部に集中していて、しかも特定の木に片寄る傾向があるので、一部だけみると被害が甚大にみえる区域もある。しかし公園全体で平均的にみると、ウソによるサクラの花芽の減少は、許容できる範囲だと言える。

◎Ⅲ　まとめ

1、一冬を通して城山公園には1日に3～28羽のウソが渡来する。

2、滞在日数は12月末から4月初めまでの94日間である。

3、ウソの主な食餌植物はサクラで、花芽の中の花の部分のみを食べる。

4、1日約10.3時間活動して、1分間の平均食芽数は10～14個である。

5、ウソ1羽の1日の食芽数は 3,800～ 8,700個である。

6、一冬に群れ全体が食べる食芽数は、少なくて4,260,000個から多くて8,700,000個となり約6,000,000個と推定される。

7、城山公園全体のサクラの花芽の総数は、約57,420,000個である。

8、ウソの食べる花芽の数は、城山全体の花芽の数の約10%である。

9、ウソの食芽による花芽の減少は、サクラの花見にはそれほど大きな影響を与えないものと思われる。

参考文献（略）

（以上は、第25回日本学生科学賞中央審査第3位入選の研究である）

○(3)両生・ハ虫類
… 両生ハ虫類班/本木利彦他・31
○(4)昆虫……昆虫班/佐々木聡子他・32
◎⑧名久井岳の生物調査報告1981……41
◎⑨三戸町比久尼坂トウヨウヒナコウモリ
…哺乳類班/堀内正敏・43
◎⑩田子町生物総合調査報告1981……52
○(1)田子町の哺乳類…哺乳類班/太田考行他・57
○(2)田子町の野鳥目録…野鳥班/堀内隆雄他・59
○(3)田子町の両生・ハ虫類
…両生ハ虫類班/本木利彦他・61
○(4)田子町の昆虫……昆虫班/佐々木聡子他・64
◎⑪自然の備忘録
○(1)八戸市八幡のヤマコウモリのバンディング
…1の2/鈴木健治・79
○(2)標識コウモリの回収報告…顧問/向山満・79
その1/トウヨウヒナコウモリ0～19の記録
その2/トウヨウヒナコウモリB～98の記録

その3/トウヨウヒナコウモリF～64の記録
○(3)1981年城山公園ニューイヤーカウント
…3の5/佐藤昭弘・80
○(4)コノハズクとカッコウの初確認
(5)コムクドリの産卵
(6)あるシジュウカラの営巣記録
…2の5/馬場富美子・80
○(7)八戸市鳥沢のゴイサギ集団営巣地
…1の3/矢倉義紀・81
○(8)ムクドリの巣箱ねぐら利用
…3の5/佐藤昭弘・81
○(9)卵調査1981……2の5/馬場富美子・81
○(10)シジュウカラのねぐら利用の変わった例
……2の4/堀内正敏・81
○(11)ブッポウソウの確認…3の1/本木利彦・82
○(12)城山公園でのカエルの巣箱利用
……1の3/野月正治・83
○(13)花木ダムのモリアオガエル
……3の1/本木利彦・83
○(14)馬淵川の魚類採集記…3の3/工藤勝利・83
○(15)オオムラサキの飼育
……2の4/玉川千枝子・90
◎⑫気象班活動報告1981
……気象班/岡田勇人他・91
◎⑬部分日食の観測…気象班/佐々木秀幸他・105
◎⑭熊原川水質調査……化学班/小島藤憲他・107
◎⑮～㉝各調査に参加して
(24名の記録)…118～140
◎㉞自然科学部に入部して(5名)……141～144
◎㉟1年間の活動状況の数々……145
…以下㊺まで略…

註　自由研究の場合、研究テーマをきめるのに苦心がいります。目次を掲載し、この学校の研究の全容をお知らせし、同時にそのご参考にと思いました。非常なご努力で貴重な結果が出されている研究物ですから全部を掲載すべきで、勝手に略すことなど許されないことと思います。しかしその立場では、研究物の部数も誌面も限りがありますので、到底多くの方に広く研究紹介をすることはできません。いつも心苦しく思いながら、愛鳥活動の普及と内容の充実のため、あえて書がせて頂いております。よろしくご諒承ください。なお詳細については当該校にお問い合わせ下さい。三戸高校に厚く御礼申し上げます。

(常務理事　下田澄子)

陳情書の提出について

愛鳥教育研究会では、日本鳥類保護連盟と協力し連署で下記のような陳情書を、１月中に各関係機関へ送付いたしました。

愛鳥教育活動につきましては、愛研会員の皆様方に常日頃ご努力をいただいておりますが、現在の教育現場では、愛鳥教育がまだ認められていない為に、これを推進することは並大底の努力ではできません。

このような状況を打開するた為愛鳥教育研究会と日本鳥類保護連盟では今後も様々な活動を通じて愛鳥教育活動を広く普及し、より活動しやすい教育環境を作っていきたいと考えております。今回の陳情書一つで、状況が変わる訳でもございませんが、今後も努力していく所存ですのでご要望等ございましたら事務局までお知らせください。

愛鳥教育活動推進についての陳情書

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

貴職におかれましては、鳥獣保護の推進につきまして日頃から深いご理解をいただき、特に日本鳥類保護連盟主催の、春の愛鳥週間、秋の全国鳥獣保護実績発表大会における、ポスターの募集・審査、小・中・高校生の研究発表の募集・審査・表彰等、格段のご指導、ご後援を賜わり、深く感謝申し上げております。

現在愛鳥モデル校は全国に約９00校ございまして、愛鳥活動を通して、自然のしくみやその大切さ、生物愛護の必要性などを学び、同時にあたたかい思いやりの心を育てることに努力しておりますが、このことは、日本の教育の目標、ゆたかな人間性の育成にせまる一つの具体的な実践方法と考えております。

また、当連盟では、自然愛護の心の育成を一つの目標とし、その実現には、小さい時からの自然とのふれ合い、特に身近な野鳥を対象とする活動が、非常に効果的であると、現在までの実績から確信しております。

そこで現在、具体的な方法として、愛鳥教育研究会の発展に尽力し、この愛鳥活動の考え方、指導方法の研究、ならびにその普及に努力しておりますが、この運動には次のような隘路がございまして遅々とした歩みとなっております。

１、身近な野鳥に気づき教材化する、その考え方や方法について、多くの教職員に理解されておりません。
（教科書にも、野鳥が取り上げられている例が少ないのです。）

２、愛鳥活動の内容、方法が普及されておりません。
（ゆとりの時間などで、全校で取り組んだり、特別活動のクラブなどで観察、保護など行ったり、野外観察学習に位置づけるなどの例が紹介されることが少ないのです。）

３、先進校が、かなりの成果をあげていても、それを広く知らせることができないでおります。
（ア　各教育委員会との連絡がとれませんので、印刷物など配布の方法が、郵送以外にございません。経費の関係からも不可能になっております。）

（イ　自然環境に恵まれている所だけでなく、大都会の中の学校でも、実績発表大会で受賞している例もございますが、何か特別な環境でないとできないと思いこまれています。また、ゆたかな自然環境の中でも、その教材化がむずかしいと考えられています。）

4、教職員から、指導上困難があるのでと、その指導を要請される野鳥の識別の研修会等行いましても、その参加者が少ないのです。

（ア　教科の研修会のように、出張が認められない例が多いのです。

○夏休みでも休暇によらないと参加できません。研修会の度に、研修扱いになるよう働きかけていただきたい。案内状も、文部省後援となるようにお願いできないかという要望がでております。

○この研修会は、野鳥を多く見かけることができる季節に行いたいのですが、休暇がとりにくいということで、夏休みに実施しております。そのため、標高の高い場所をえらぶなど苦心しております。）

（イ　この研修会を開催する機関も少ないので、教育委員会、学校が、教科等の研修会と同列にお考えいただけるようご理解いただきたく、文部省後援、都道府県教育委員会後援などのご援助を賜わりたいのです。）

愛鳥教育活動の実践状況につきましては、高等学校では、クラブ活動でかなり高度な自然観察や保護活動が実施されている実例があります。また、中学校では、生徒活動として、積極的に、学区域の野鳥の保護、自然環境保全に努力し、地域の清掃やその思想の普及など、郷土愛にめざめた実践活動が行われている例があります。特に小学校では、ゆとりの時間に野鳥の観察や保護活動をして、全校的にゆたかな情操の育成、相互扶助の実践活動を展開している例や、特別活動のクラブ活動で、野鳥の観察から自然のしくみのすばらしさを知り、思いやりの心が身につくようになったなど、多くの成果があげられております。

何卒、この愛鳥教育活動が、多くの隘路を克服して円滑に推進できますよう、その普及発展につきまして、ご配慮、ご援助を賜わりますようお願いいたします。

昭和60年1月20日

財団法人　日本鳥類保護連盟
会長　山階芳麿
愛鳥教育研究会
会長　田村活三

文部省　初等中等教育局局長　殿
文部省　高等教育局局長　殿
文部省　社会教育局局長　殿
都道府県教育委員会教育長　殿

常務理事会報告

総会・研修会の日時について

常務理事　下田澄子

機関誌〝愛鳥教育14号〟に、「研修会の内容について」の標題で、8月に行われました研修会での話し合いの内容をご報告申し上げましたが、その後の常務理事会において、これらについて種々検討致しました。

そのうち特に、総会の日時との関係で、いろいろ考えを述べ合いましたが、結論を申しますと、やはり野鳥とのふれ合いが行われ易い初夏に、探鳥会を主とした会合を行い、夏休みに、総会、講演、研究発表など行う方がよいのではないかという方向で意見がまとまりました。

いろいろご意見がおありのことと存じますが、一応この方向で、来年度の計画をたて実施されることになりますので、よろしくご了承くださいますようお願い致します。

なおこの時の常務理事会では、「私たちの自然」の中の、愛鳥教育の欄について執筆者、内容等検討、冬の研修会の計画、次号愛鳥教育の編集、などが主な議題でした。

またこの他に、新春早々、北海道で支部が結成されるというお話しがありまして、それについて支部長さんに、大会の様子、規約、組織、メンバーなど、次号に寄稿してくださるようお願いするなど話し合われました。

冬期研修会報告

恒例の冬期研修会は、1月27日明治神宮において行われました。

愛鳥教育No.14″の14ページにお知らせを掲載し、お申し込みをお待ちしていたのですが、会員の方々からの反応はなく、参加者がまったくないのではないかと大変に心配しておりました。その結果、案の定、参加者は6名で常連の方のみ。特に何十人も集まっていただく必要はないと思いますが、余りに内輪の研修会となってしまいました。

今後の研修会のあり方を検討する必要がありそうです。しかし、オオタカがじっくりと観察できて参加者一同は満足しています。

出現鳥類種名（分類順）

ダイサギ、コサギ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、オオタカ、ドバト、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、計24種

参加者氏名（五十音順）

石橋寿春・寿郎、下田澄子、杉浦嘉雄、杉田優児、田村活三、他日本鳥類保護連盟職員・斉藤一紀、手代木大助

愛研北海道支部誕生

かねてから、北海道（札幌市）においては愛研会員相互の親睦が、理事の一人である柳沢信雄氏の呼びかけにより行われておりました。「第１回札幌会員の集い」が昭和57年８月31日に開催されており、そして、この度はめでたく〝愛鳥教育研究会北海道支部〟として、去る１月26日に発足いたしました。もちろん、この支部誕生は愛鳥教育研究会第１号です。

設立の呼びかけにつきましては、柳沢信雄理事のご尽力により、道内愛研会員はもとより北海道野鳥愛護会員，北海道自然観察指導員連絡協議会員、札幌市内小学校の愛鳥活動に熱心な方々などにお知らせし、総会には32名の方が出席されました。議事は、経過報告から始まり、支部規約、事業計画、予算、役員選出などについて、なごやかな雰囲気の中にも真剣な話し合いが行われました。その結果、支部役員には下記の方々が決定いたしました。

支部長	柳沢　信雄
副支部長	水崎　　満
幹事	霜村　耕一
	伊藤　幸雄
	梶浦　孝純
監事	北出　俊夫
	渡辺　照彦

また、設立総会の後には記念講演会も催され、日本鳥類保護連盟職員・柳沢紀夫氏をお招きして「愛鳥教育にはじめて取り組もうとする方々へ」と題してお話しをしていただきました。

翌27日は、北海道支部第１回研修探鳥会として藤の沢小鳥の村〈白鳥園〉において、給餌台に来る野鳥の観察と意見交換会を実施いたしました。

支部では、今後、支部報の発行や意見交換会、研修探鳥会などの開催を中心に、活発な支部活動を展開する予定です。

北海道支部事務局

〒003　札幌市白石区栄通８丁目３－11

支部長　柳沢　信雄方

愛鳥教育研究会北海道支部規約

第１条　名称及び事務所

この会は、愛鳥教育研究会北海道支部といい、事務所を支部長の所在地におく。

第２条　目　的

児童・生徒に野鳥を通して自然に親しみ、ゆたかな心情を養うため、愛鳥思想の普及ならびにその実践および諸問題の研究を行い、愛鳥教育の振興を図ることを目的とする。

第３条　事　業

この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　本部と連絡を密にとりながら、支部会員相互の研修交流
2　地域に密着した愛鳥教育の実践
3　愛鳥教育の内容および技術の研究
4　愛鳥教育普及のための活動
5　その他、愛鳥教育に必要な事項

第４条　会　員

この会の会員は、北海道に在住する愛鳥教育研究会の会員をもって構成する。

第５条　役　員

この会に、次の役員をおき、それぞれの職務を担当する。

1　支部長　１名　支部を代表する。
2　副支部長　１名　支部長を補佐し、支部長に事故あるときは、これを代行する。
3　幹事　若干名　会務を分担し、会の運営にあたる。
4　監事　２名　会務および経理を監査する。
5　役員は、総会において選出する。任期は１年とする。再任は防げない。

第６条　会　議

1　総会は、毎年１回開催し、会の運営及び事業の執行等全般について審議する。
2　役員会は、必要に応じて開催し、事業の執行等について審議する。

第７条　会　計

1　この会の経費は、会員の会費、その他をもってあてる。
2　この会の会費は、年額500円とする。
3　会計年度は、毎年４月１日にはじまり、翌年３月31日に終る。

第８条　付　則

この会則は、昭和60年１月26日より発行する。

夏期研修会の開催について

毎年恒例の夏期研修会は、例年、８月に実施いたしておりましたが、本年度より、野鳥の観察に適した５～６月に開催することとなりました。

今回は下記のように、６月１日～２日にかけて山梨県・山中湖畔において実施いたします。

会員諸氏多数のご参加をお待ちいたしております。

記

日　時　６月１日(土)～２日(日)
場　所　山梨県・山中湖畔
宿　泊　東京ＹＭＣＡ山中湖センター
参加費　１人　7,000円（１泊３食付・交通費別）
定　員　30名
申　込　電話かハガキで５月20日までに事務局へ。
　　申し込み金1,000円。

スケジュール

６月１日
　午後1:00　富士急山中湖バスターミナル前集合
　　旭日ヶ丘バード・ウォッチング
　　5:00　東京ＹＭＣＡ山中湖センター着
　　6:00　夕食
　　7:00　研究発表・意見交換会
　　9:00　就寝
６月２日
　午前6:00　起床／早朝バード・ウォッチング
　　8:00　朝食
　　9:00　山中湖畔バード・ウォッチング
　　12:00　昼食
　午後1:00　解散（富士急バスターミナル前）

その他
・現地集合・現地解散ですので、山中湖までの交通費は各自負担です。
・６月１日午後１時に集合できない方は、当日午後６時までに宿舎の東京ＹＭＣＡ山中湖センターへお越しください。
・詳細については事務局にお問い合わせください。

昭和61年度　愛鳥週間用ポスター原画募集

毎年恒例となっておりますこのコンクールは、全国の小学校、中学校、高校の児童生徒から作品を広く募集し、その制作過程を通じて野鳥保護思想の高揚をはかるとともに、愛鳥週間の周知を目的として行っております。

本年も、５月の愛鳥週間に向けて募集が始まりました。各学校には、各都道府県の鳥獣行政担当課や教育委員会を通じて、募集のお知らせが届くことと思いますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

連盟では、各都道府県から推せんされたポスターを７月末日までに取りまとめ、数回の審査を経て、11月に入賞者を発表し、その内の１点を昭和61年度愛鳥週間用ポスターに採用しております。

どうぞ愛鳥週間用ポスター原画募集に、たくさんのご応募をいただきますよう、特に愛研会員の先生方の学校につきましては是非ともご応募くださいますようお願い申し上げます。

愛鳥のつどい

第19回 全国鳥獣保護実績発表大会記録

1985・3

環境庁・(財)日本鳥類保護連盟

愛鳥のつどい

第19回全国鳥獣保護実績発表大会記録

目次

はじめに　3
環境庁長官賞
　東京都福生市立福生第五小学校　4
文部大臣奨励賞
　熊本県熊本市立松尾西小学校　6
　神奈川県秦野市立末広小学校　8
林野庁長官賞
　北海道沙流郡平取町立豊糠小中学校　10
　宮城県立小牛田農林高等学校・林業科クラブ　12
日本鳥類保護連盟会長賞
　愛知県犬山市立今井小学校　14
環境庁自然保護局長賞
　福岡県飯塚市立八木山小学校　16
　高知県宿毛市・愛媛県南宇和郡一本松町
　　篠山小中学校組合立篠山中学校　18
日本鳥類保護連盟会長褒状
　茨城県新治郡桜村立竹園東小学校　20
　山形県米沢市立三沢東部小学校　22

第19回全国鳥獣保護実績発表大会愛鳥のつどい記録

昭和60年３月

発行　環境庁
受託　(財)日本鳥類保護連盟
〒150 東京都渋谷区宇田川町37－10
渋谷レジデンシャルオフィス405
ＴＥＬ　03(465)8601

本報告書は、(財)日本鳥類保護連盟が環境庁から委託を受けて実施した「第19回全国鳥獣保護実績発表大会」の報告書を、環境庁自然保護局長の承認を受けて発行したものです。

（承認　昭和60年３月27日　環自鳥第60号）

はじめに

財団法人 日本鳥類保護連盟

昭和41年より始まった「全国鳥獣保護実績発表大会・愛鳥のつどい」は、今回で第19回を迎え、本年には20周年となっていよいよこの大会も成人式を迎えます。

この行事は、全国の小学校・中学校の愛鳥モデル校を中心に、一般団体（高等学校のクラブ活動や社会人）などが、野鳥に親しむ活動を通じて自然や野鳥の調査などを行い、自然愛護の精神を養うとともに、どのような鳥獣保護に関する実績を残したのか発表する場であります。

大会に出場するためには、47都道府県の鳥獣行政担当課と教育委員会によって、数多くの学校や団体の中から審査され代表として選ばれなければなりません。各都道府県知事から推せんされた学校及び団体の審査資料は、(財)日本鳥類保護連盟に集まり、本大会の主催者である環境庁・(財)日本鳥類保護連盟、後援者である文部省・林野庁と、そして日本鳥学会、(財)日本野鳥の会、(財)山階鳥類研究所、愛鳥教育研究会の協力を得て、厳正な書類審査が行われ大会への出場校10校を決定いたしました。

発表大会は11月19日、環境庁・講堂において多数の関係者並びに見学者が集まった中で開催され、出場校の発表が行われました。発表終了後には、即座に発表校の審査が行われ、各賞の受賞者が決定されて表彰を行いました。

ここに収録されている発表内容の要旨は、各発表校から提出された発表内容資料をもとに、(財)日本鳥類保護連盟が環境庁から委託を受けてまとめたものです。この報告書が、今後、学校における愛鳥教育活動や愛鳥思想の普及活動の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この大会に参加された出場校や見学された皆様、関係者の方々に改めて厚くお礼申し上げます。

環境庁長官賞

「愛情豊かな子どもを育てる愛鳥活動」

東京都福生市立福生第五小学校

1、学区の概況

本校は、東京都の西部（武蔵野台地の西はじ）に位置した福生市にあり、加住丘陵・草花丘陵・狭山丘陵に囲まれている。

福生市は、基地の町として知られるように東洋一の米軍横田基地があり、現在急速に都市化しつつあるが、その中でも本校は、大きな雑木林や多摩川などが近くにあり、今なお多くの自然の残る恵まれた環境にある。

2、本校愛鳥活動の歩み

本校は、昭和44年4月、水田の広がる多摩川の河川敷を造成し開設された。当時、学校周辺は市内で最も自然環境に恵まれた学校であった。

教育目標のひとつである「愛情豊かな児童の育成」は、この豊かな自然環境を生かし、自然に親しみ自然を大切に守り育てる心豊かな子どもを育もうとするねらいで設定され現在に至っている。

愛鳥活動は本年で15年目を迎えた。開校当初は愛鳥活動も手さぐりの時代で、鳥の好きな児童の野鳥継続観察が、46年に「愛鳥クラブ」が誕生し、47年には「愛鳥モデル校」に指定された。組織的な活動の母体として、職員による「愛鳥研究部」も校務分掌の中に位置づけられ、活動は次第に全校的なものとなってきた。48年には、秋冬2回の全校観察会が計画され、バードウィーク行事が活動の中に取り入れられ愛鳥活動は少しずつ全校児童の中に広まった。

昭和54年には「学年のめあての鳥」を設定し、児童一人一人の観察ファイルを備え、56年から愛鳥指導資料（事前指導用ビデオ作成や野鳥生態ビデオの収集など）の整備に着手した。

この間愛鳥活動は、学校行事及びゆとりの時間を中心に実施していたが、58年からは、愛鳥活動を教科、道徳の領域にも広げ、児童の愛鳥日記・作文などを活用して、生命の尊重、思いやり、愛情等の育成に努力しようと、現在も「愛情豊かな子どもを育てる愛鳥活動」の主題で研究に取り組んでいる。

3、本校の愛鳥活動

(1) 愛鳥活動のねらい

野鳥観察を中心に、自然をみつめる意識を高め、自然を大切にする愛情豊かな児童を育てる。

①自然に親しみ、愛情を豊かにする。

②学年のめあての鳥を決めて、系統的に観察をすすめる。

③野鳥に関する基礎的な知識や理解を実践的に深める。

④継続して観察調査することに興味をもたせ、科学性・創造性を高める。

⑤自然の偉大さに気づき、すみよい環境づくりに協力する。

(2) 活動内容

①全校的に取り組む年間行事（年3回）

・春と野鳥…バードウィーク行事として、写真、絵、ポスター、ひと口知識などを展示し、児童が書きこみできる図表として、「鳥の絵をかこう」「ツバメの来た日」「カッコウの鳴き声を聞いた日」「野鳥の鳴き声」「校庭の巣箱」「巣をみつけた所」「野鳥をみた所」などを掲示している。また、放送委員会は朝昼の放送で愛鳥コーナーを設け、野鳥のレコードやテレビ放送をしている。

・台風と多摩川…秋の全校観察会を行い、台風による多摩川や自然の変化を観察する。

・冬と野鳥…秋川と多摩川の合流点昭和堰付近に渡来するカモなどの冬鳥を観察する。

事前観察会には職員と愛鳥クラブ員が参加し、観察会の適地を見定め、観察会の補助員（愛鳥クラブ員）と打ち合わせをし、観察会に向けての予備学習をする。

事前指導は、全校一斉にめあての鳥の特徴・習性・見分け方や観察カードの記入のしかたなどをテレビ放送で行っている。

全校観察会は、学年のめあての鳥を中心に観察し、事後指導で学年ごとに個人ファイルにまとめる。

②愛鳥クラブの活動

野鳥観察・調査等の諸活動を通して、野鳥についての知識を深め、野鳥に親しみ、自然愛護・自然保護の協力者となる実践力を育てることをねらいとしている。

クラブ活動の中心は、学校周辺の野鳥観察で毎月３～４回程度観察に出かける他、バードウィーク行事の掲示物の準備と整理、全校観察会の補助とまとめ、野鳥観察コース作り、野鳥のお墓づくり、傷ついた野鳥の保護、テグス調査と釣人への呼びかけ、福生の野鳥観察結果のまとめなどの活動を行い、本校愛鳥活動の原動力となっている。

卒業生たちが自然保護の協力者として、福生自然観察グループの会員となり、市の自然観察教室のシニアリーダー・ジュニアリーダーとして活躍しているのもみのがせない。

③遠足・野外活動

遠足には、ゴミの持ち帰り、動植物を取らないなど、自然愛護の心を養い、コースの中に近くの愛鳥モデル校見学や野鳥観察などを取り入れている。

６年生の林間学校（精進湖）では、自然観察計画にそって事前に「富士山の自然」「富士山の植物と野鳥」「お中道観察コース」について学習し、実地に植物の高度分布や高山の野鳥を観察する。

④学年学級の活動

本校愛鳥活動の実践の場と推進は学年学級にあり、愛鳥活動計画の具体化は学年部会にまかされているため、活動が固定化せず独自の発想を生かしたものになっている。

低学年は野鳥に「親しむ」活動、中学年は「知る」活動、高学年は「守る」活動を基本姿勢として取り組んでいる。最近の取り組みをあげると、１年生は「鳥についてのおしゃべり採集」、２年生は「愛鳥ノート」「ムクドリ日記」、３年生は「観察日記」「愛鳥文集」「リレーはがき」、４年生は「愛鳥日記、５年生は「ササゴイとともに」で２年間継続観察し成果をあげ、「野鳥に関する意識調査」も行った。６年生は、学芸会で野鳥に関する「創作劇」「紙芝居」「研究発表」をし、「ピッピの旅立ち」と題した、巣から落ちたイワツバメの旅立ちまでの様子をまとめた。

⑤自然保護にかかわる取り組み

○植樹…校内にピラカンサスやネズミモチなどの餌木が約30本植えてある。学級園には、理科教材用のアブラナ・ヒマワリ・ヤグルマソウなど育てているが、継続観察の分には網をかけるが、それ以外は野鳥たちに自由に食べさせるようにしている。

○巣箱の製作と修理…６年生の卒業制作に巣箱を作り、近くの雑木林や校内にかける。

○自然愛護を呼びかける立看板…これも卒業制作として、多摩川に来る人たちに自然愛護を呼びかける立看板を毎年たてている。

○河原の清掃…児童会の取り組みとして、学期に１回ずつ全校で多摩川の清掃を行い、野鳥のすみよい環境づくりに協力している。

○野鳥の保護…巣から落ちたヒナや傷ついた野鳥を本校に持ってくる児童や地域の人が多い、幸いなことに学校の近くに、東京都西部地区の「鳥獣保護センター」があるので、そこで手当てしてもらったり、学校で手当てして巣にもどしたり、学級で飛び立てるまで保護している。死んだ鳥については、記録写真を撮り、よく観察したあと、野鳥のお墓に埋めている。

４、おわりに

本校に入学してくる１年生が、五小は鳥のことを勉強する学校だという意識をもっているほど、15年間の愛鳥活動が地域の人たちの間に浸透してきた。しかし、まだ多摩川をジープで走り回り、イワツバメの巣を子どもたちの見ている前で平然と棒で落とし続けている現実があります。いつの日か、人間と野鳥が共存できる日まで、愛鳥活動を続けていこうと思っています。

文部大臣奨励賞
「私たちの愛鳥活動」

熊本県 熊本市立松尾西小学校

1、学校の紹介

私たちの学校は熊本市の一番西側にある学校です。学校の南側は水田が広がっており、その向こうは、坪井川河口から有明海へと続きます。北側は一面のみかん畑で金峰山へと連なっています。東側は水田の向こうに阿蘇の連山も望むことができます。

数年前までは、私たちは野鳥についてあまり関心を持っていませんでした。でも、昭和55年度に愛鳥モデル校に指定され、野鳥についていろいろな勉強をしたり、自然の中で活動したりしているうちに、たくさんの野鳥を覚え、かわいがるようになってきました。また、自然のすばらしさや、自然を守ることの大切さにも気づくようになりました。

2、私たちの愛鳥活動の内容

私たちの愛鳥活動には、野鳥とのふれ合い活動、野鳥をくわしく知る活動、野鳥や自然への関心を高める活動などがあります。

野鳥とのふれ合い活動では、学級探鳥会・自然観察の日の観察・毎日の観察や給餌給水活動・巣箱かけ、勤労体験園での野鳥のえさとなる作物のさいばいなどをしています。

野鳥をくわしく知る活動では、探鳥会などで見た鳥の生態や特徴などをくわしく調べたり、巣を分解して巣材を調べたり、よく入る巣箱を工夫したりする活動などをしています。

野鳥や自然への関心を高める活動では、野鳥について調べたことを作文に書いて発表したり、絵に書いたり、カルタやカービングを作ったりする活動をしています。また、愛鳥集会などもしています。

①野鳥とのふれ合い活動

私たちの学校では、朝8時になるとミュージックチャイムから、松尾西小愛鳥の歌「鳥は友だち」の曲が流れてきます。私たちの一日は、この音楽や野鳥の声と共に始まります。

校内には各学年1台ずつ6台の給餌台があります。また、校庭の一部にある愛鳥の森にはバードバスや池もあります。

11月から3月までは各学年で相談して、ミカン、ヒマワリの種、アワ、パンくず、柿、ジュースなどを野鳥に与えています。スズメ・メジロ・ジョウビタキ・ツグミなどがやってきます。ヒヨドリやカラスはミカンを輪切りのままくわえていきます。ドバトやキジバトなどは窓からのぞいていてもえさを食べています。

昨年は巣穴を2.8センチにしたシジュウカラ用巣箱を校内に10個取り付けました。今年は2個の巣箱にシジュウカラが営巣しました。1つの巣箱は途中で止めてしまいましたが、1個の巣箱からは無事巣立っていきました。9月に校内のカイズカイブキの木の2メートルぐらいの高さにキジバトが巣を作りました。全校でヒナが育っていく様子を観察しました。

うみかぜタイムで年に3回、学級ごとに探鳥会にでかけます。5月と11月は野山の鳥、2月は海に渡り鳥を観察にでかけます。探鳥コースも、「ヒバリコース」「ホオジロコース」「シラサギコース」「カモメコース」と4つに分けています。野山コースでは約15～20種ぐらい観察でき、水辺コースでは、冬にカモ、シギの大群を観察することができます。

水曜日の8時45分から20分間は自然観察の時間です。学級の計画により、校庭から裏山にいる野鳥を観察したり、屋上から海にいる鳥を望遠鏡を使って観察したり、コサギを中心に観察したり、モチの木やセンダンの木を年間を通して継続観察したりする活動などをしています。

校舎の1階から2階へのおどり場に、「ぼくの見た鳥・わたしの見た鳥」の黒板を作っていただきました。私たちは、登校中や学校で遊んでいる時みかけた鳥の写真をこの黒板にはります。

観察クラブの人たちは、クラブ活動の時間に野鳥の観察にでかけます。その時見られた野鳥はノートに記録し、また、結果は学校のみんなにも知

らせます。カワセミが学校のすぐ近くにすんでいるのを発見したのは観察クラブの大てがらでした。愛鳥委員会の人たちも、巣箱の点検、給餌台のそうじ、見られる鳥の紹介などで活躍しています。

学校の東側には２アールの勤労体験園がありますが、ここでは野鳥にあげるヒマワリ・トウモロコシ・アワをさいばいしています。

②野鳥をくわしく知る活動

低学年はスズメやツバメなどの身近な野鳥について調べます。形や大きさを知るため模型を使って遊んだり、鳴き声のテープを聞いたり、ＶＴＲを見て、飛び方やえさの食べ方をまねしたりします。中学年はホオジロやコサギなど地域にすむ野鳥を中心に、形態の特徴をすばやくスケッチして書きこみをしたり、動作や習性をおぼえたり、えさを調べたりします。高学年では渡り鳥などを対象に、野鳥と自然の結びつきについて調べます。また、シジュウカラの巣材を調べたとき、毛布の毛や犬の毛がたくさんまじっていたのでとてもおどろきました。野鳥と人間がこんなに身近な関係にあることなどとても信じられないことでした。

③野鳥や自然への関心を高める活動

私たちは全校でバードカービング作りに取り組みます。低学年は紙粘土で作ります。まず、針金でしんと足の部分をつくります。次に竹を割ってくちばしと尾をつくります。その後、紙粘土で形をつくり、まち針をさして目にします。最後に色をぬりニスで仕上げます。高学年のカービングは、紙粘土が発泡スチロールにかわります。カッターで粗けずりし、やすりをかけて色をつけます。

１年生の作品は木にとまらせ、熊本市の造形展に出品しましたが、その作品が評判となり新聞やテレビでも紹介されました。また、５年生は野鳥の親子の愛情をテーマに発泡スチロールや紙粘土を使って作品を作りました。

野鳥の名前や鳴き声、体の特徴などを早くおぼえるのによい方法は、愛鳥カルタを作ることです。毎年、「うみかぜタイム」でカルタ作りとカルタ遊びが計画されています。私たちの学校の子どもたちは、３・４年生で70～80種、５・６年生では100種以上の野鳥の名前をおぼえています。

私たちの学校では、毎月、第３月曜日の２～３校時の業間20分間に愛鳥集会があります。４月に年間計画を立て、愛鳥委員会・集会委員会が中心となり進行します。各学年の発表や委員会からのお知らせなどが主な内容です。愛鳥週間中の愛鳥集会では「ウルトラ鳥あてクイズ」が計画されました。全校児童が運動場に集合し、だんだんむずかしくなっていくクイズに挑戦しました。

④その他の活動

夏休みのＰＴＡ行事として、昨年まで親子で協力しながら巣箱作りを楽しんできました。しかし、巣箱の作り方をほとんどの人が覚えることができたし、各家庭にある巣箱の数も増えてきたので、話し合いの結果、今年から親子で鳥作りに挑戦することになりました。親子でアイデアを出し合い鳥作りの楽しい１日をすごしました。

毎年１月に文集「うみかぜ」を発行しています。これは、１年間、愛鳥活動をしたことの中から取材し、作文を書き、文集にするものです。

また、のり網にかかり傷ついたカルガモ、ビニールハウスに入り込み傷ついたゴイサギ、傷をおい飛べないノゴマなどが運び込まれた時、回復するまで保護した事もありました。

３、おわりに

私たちは、愛鳥モデル校に指定されるまでは、ほとんど野鳥を注意してみるようなことはありませんでした。しかし、耳をすますと野鳥の歌が聞こえるようになりました。ひとみをこらすと、遊んでいる海の鳥の姿も見えるようになりました。野鳥がほんとうに人間と身近な関係にあるのだということもわかりました。

私たちの愛鳥活動は、校区の方々にも理解され、愛鳥の輪がだんだん広がっています。誰もが野鳥を愛する楽しい町になるように、これからも活動を続けていきたいと思います。

文部大臣奨励賞
「鳥と私たち」

神奈川県秦野市立末広小学校

学校の紹介

私達の学校は、神奈川県西部・丹沢山地のふもとに広がる秦野盆地にあります。児童数1300人、昭和52年にできた８年目の学校です。学校のすぐ前には金目川が流れ、さらにその東側には標高２00ｍほどの弘法山があります。金目川や弘法山には、たくさんの野鳥がすみ、私達の探鳥コースになっています。

開校して３年目に、学校の鳥「カワラヒワ」を児童会で決めました。一年中学校のまわりで見られるカワラヒワをシンボルとして、開校以来８年間愛鳥活動を続けてきました。

本校の愛鳥活動

私達の愛鳥活動は、(1)調べる活動　(2)広める活動　(3)守る活動　の３つです。56年・57年に秦野市の〝愛鳥モデル校〟になってからは特に盛んになりました。

①野鳥のことを自分の目で調べよう
②野鳥のことをみんなに知ってもらおう
③野鳥のためになることをしよう

この３つを合言葉に愛鳥委員会33名、野鳥クラブ40名を中心に活動に取り組んでいます。

調べる活動

私達は毎月学校のまわりの野鳥の調査をしています。金目川を中心に付近の田んぼまでの、500ｍほどのコースで調査をします。このコースでは、町や川辺にすむ野鳥が見られます。これまでに、17科24種を確認しましたが、57年12月以降はカワセミの姿が見られなくなり残念です。また、学校内の野鳥の巣の調査をしています。今年はカワラヒワ、スズメ、ヒヨドリ、セグロセキレイ、キセキレイ、キジバトの６種類が巣をかけました。

愛鳥特派員ニュースは、放送委員会の人と協力してやっています。登下校する途中に見た変わった鳥のことや、珍しい場面を見たら、校内に置いてある特派員ニュースの用紙に書いてもらいます。ニュースを報告してくれた人には、特派員バッジが配られ、給食の時にテレビでそれらのニュースを放送しています。

毎年、私達が取り付ける校庭の給餌台にはヒヨドリをはじめ、スズメ、メジロ、ムクドリなどがやってきます。そこで今年の冬は、野鳥たちが給餌台に残している糞の中の植物の種を調べることにしました。どんな種が多いかを調べて、その種をまいて、学校に野鳥の好きな植物を増やそうと思ったからです。校庭の６ヵ所の給餌台から、１週間に２回ずつ残されている糞を集めました。

５月になって、１月末から５月半ばまでに集めた４ヵ月間の糞を洗い出し、中から出てきた種を整理してみました。私達が思っていたよりもはるかに多く、39種類、487つぶもの種が見つかりました。名前のわかった種はオモトの種と、アオキの種だけで、後は何の種かさっぱりわかりません。特にたくさんあった11種類の種をまいてみました。その中の１種類が発芽し、ヤブガラシであることがわかりました。

名前のわからない種は、県の自然保護センターの方にお願いして調べていただきました。その結果、名前のわかったものはモチ、ナンテン、マサキ、ツルウメモドキ、コナラなど16種類になりました。この中には、校内に植えられていない植物としてセンダン、シロダモ、コナラ、マンリョウ、アオキなど９種類があり、学校のまわりや林などで食べて運ばれたものだとわかりました。

広める活動

毎年行われるバード・ウィークには、愛鳥ポスターや実のなる木の募集を行います。校内放送では、みんなが描いたポスターの紹介や野鳥の説明、野山の野鳥のビデオ放映を行います。また、図書委員会の協力で、図書室に愛鳥コーナーができました。野鳥の図鑑や、鳥の読み物がそろって、自由に読んだり調べたりできるようになりました。

私たちは野鳥に親しむために、月２回の児童朝会の時に１分間探鳥会を行っています。耳をすましてよく見ていると、校舎の屋上で「チチン、チチン」と鳴いているセグロセキレイや、金目川の

上を飛ぶコサギの姿など、たった1分間でも5～6種類の野鳥が見つかります。

さらに野鳥のことを知ってもらうために、1年生から3年生までの全員に、愛鳥委員会が作った愛鳥ぬり絵カレンダーを毎月配っています。3年生から6年生には、私達の作ったバードブックを配っています。どこででも利用できるように、野鳥の見分け方、末広小のまわりで見られる野鳥の絵と説明、探鳥会の観察記録などを入れました。このバードブックを持って探鳥会に行きます。探鳥会で見た野鳥は、バードブックの中の絵に色をぬっていきます。自分だけのバードブックを作っていけるようになっているので、とても楽しみです。探鳥会には、野鳥クラブでの定例探鳥会をはじめ、全校で行っている1分間探鳥会や、4年生以上で行っている学年別探鳥会があります。さらにお父さん、お母さんも参加できる親子探鳥会があります。

探鳥コースの途中には、この近くで見られる野鳥の看板を全部で6ヵ所に立てました。いろいろな野鳥を知ってもらうため、毎月絵を入れかえています。

こうした探鳥会など活動の様子は、広報委員会が発行するイチョウ新聞で家の人にも伝えられます。このため、お父さんお母さんも野鳥に興味を持って下さり、毎年行われる親子給餌台作りにも、たくさん参加してくれます。

守る活動

末広の森をはじめ校内には、私達の呼びかけで学区の方がゆずって下さった実のなる木がたくさんあり、ミカン、ピラカンサス、ユズ、フサスグリなど20本以上も植えられています。6年生も卒業記念に実のなる木を植えていってくれます。また、栽培委員会も協力してヒマワリを育ててくれ、冬の間の大切な野鳥の餌となります。

毎年11月には、夏休みに作った巣箱を持って弘法山へかけに行きます。昨年の利用調査から、林の中にかけた巣箱より、林のふちにかけた方がよく利用されたことがわかり、今年はそのことに注意して8ヵ所にかけました。その後1月と8月の調査結果から、5個の巣箱にはねぐらとしての利用やヒナの育った跡があり、活用されていることがわかりました。

ヒナが巣立つ時期には、巣から落ちたり、傷ついたりしたヒナが愛鳥委員会に持ち込まれます。この1年間ではカワラヒワ、ムクドリ、キジバト、ドバト、スズメ、ツバメ、ササゴイなど17羽にもなりました。みんなの世話のかいがなく死んでしまう野鳥もいます。そういう野鳥たちのために、先生方と私たちが協力してお墓を作りました。

私達が昨年から力を入れているものに、川や海辺に落ちているつり糸、つり針をひろう活動があります。先生のお話で、何気なくつり人が捨てているつり糸で、野鳥が傷ついたり死んだりしているということを知りました。足につり糸がからみ指がもげてしまったドバトや、つり針を飲み込みつり糸が木にからみつき宙づりになってしまったムクドリの写真などを見て、本当にかわいそうに思いました。

私達の呼びかけで、1年目は校内に置いた〝つり糸・つり針ひろいの箱〟に、たくさんの糸や針が集まりましたが、今では、金目川に糸や針を捨てる人が少なくなり、その数は昨年の半分位になりました。愛鳥特派員ニュースの中にも、だれかが捨てたゴキブリとりの紙にスズメの足がくっつき、苦しんでいるところを助けてあげたというニュースがありました。

鳥には手がありません。私たちが何気なくやっていることが、野鳥にとっては大変なことかもしれません。私達は自分たちのことだけでなく、野鳥の立場に立って考えてあげなければ、いけないと思いました。

これからも、かけがえのない自然や野鳥を大切にしていきたいと思います。

林野庁長官賞
「私たちの愛鳥活動」

北海道沙流郡平取町立豊糠小中学校

1、私たちの学校と、とりまく環境

私たちの学校は現在、小学校・中学校合せて5人という本当に小さな学校です。中学生は1人で、あとは小4・小3・小2・小1それぞれ1人です。

学校のある位置は、北海道の屋根とも言われている日高山脈の山ふところにあります。

また、私たちの住む豊糠地区は、戦後の農地開放によって牧場の開墾がはじまりです。

一時は、地域の戸数が60戸もあり、全校児童・生徒数が百名近くもいたそうです。

その後、離農がはげしく、そのうえ、苫小牧東部工業開発が進み、それに伴なってダム建設が必要となり、地域の一部が水没することになりました。今では、戸数20戸程となり、4月初め8人いた仲間も3人が転校し、5人となりました。

豊糠の自然は、地域のおかれている現状とは違って、とてもすばらしいところです。一口では言いあらわせませんが、大自然に包まれた緑り豊かな木々、そうして起伏に富んだ山野です。この様な自然環境の中で、私たちが取り組んできた愛鳥活動の実践を発表します。

2、自然学習のはじまり

昭和51年に、地元の振内営林署豊糠担当区の協力により小鳥の村を開設し、これがきっかけではじまったと聞いています。当時は、小鳥の村の開閉村だけのようでしたが、自然学習に本格的に力を入れ始めたのは、4年前頃からです。この学習のねらいは「恵まれた豊糠の自然環境を生かし、自然に親しみ、野鳥に対する知識や理解を深めることにより愛鳥の心を持つこと」です。

3、愛鳥活動

(1) 野鳥観察

私たちの愛鳥活動の中で、一番力を入れている活動は野鳥観察です。その活動の状況については年度の活動のまとめ〝しぜん〟に集録してあります。現在3号まで発行しています。

観察活動を通して得たことは、今までただぼんやりと無関心で過ごしていたのが、自然界に大きく眼を向けるようになったことです。

豊糠地区に60種余りの野鳥が生息または飛来することを知りました。そして、わからない鳥について図鑑などで調べるといった積極的な態度があらわれ、登下校などの時、観察ノートやハンドブックを携帯しています。

また、お昼の校内放送で、愛鳥放送として観察した事柄や鳥の鳴きまねなどを録音して放送しています。

今年のバードウィークに、NHKテレビ放送で私たちの野鳥観察活動が全道に紹介されました。それは「はつらつ北の子どもたち」という番組で「野鳥観察に取り組む8人の子どもたち」というタイトルでした。この放送後は、一段と野鳥観察に力が入ってきました。

自然の時間を使っての探鳥会や、年1回、苫小牧ウトナイ湖にある、サンクチュアリに出かけ、レインジャーからお話しを聞き、勉強しています。

(2) 巣箱の設置と手入れ

小鳥の村開設より先輩たちが数多くの巣箱を取りつけてきましたが、自然学習を計画的にするようになってから約140個程巣箱をかけました。毎年、4月と10月に行われる小鳥の開閉村の時、巣箱かけや手入れ・小鳥の生息状況などを調査しています。私たちがかけた巣箱に小鳥が入っているかどうか調べるのがとても楽しみであり、また不安です。経験から、巣箱はきれいに出来たものより、少し雑に、ごく自然に出来た方が、よろこばれるようです。入り口の穴の大きさも十分考えて作ることが必要です。

(3) 餌づくり

長い冬の間、野鳥たちは、どうしても餌が不足します。そこで校舎の空地を利用して、ヒマワリやトウモロコシなどを栽培し、鳥たちの餌づくりをしています。また、パン工場からくずパンをもらってきて、それをくだいて餌の確保につとめています。

(4) 給餌台の世話

給餌台は、学校のまわりと先生方の住宅の近くに12台取りつけています。そのうち、学校のまわりにある８台について私たちは管理をしています。以前は生徒数も多かったので当番制でしたが、今年は毎日です。

餌台にはヒヨドリやカケスなど10種類程やってきます。最初のうちは、野鳥特有の警戒心で寄ってきませんが、だんだん馴れると近くまでくるようになります。こんな時、野鳥にも人間の善意がわかるのだろうかと思います。もっと、もっと近づいて野鳥の友達になれたらなあと思います。

(5)　野鳥に関する制作

私たちが観察した地域の野鳥を製作するため、自然学習や教科の時間、美術・技術の時間を使って製作にはげんでいます。また、地域の人たちやお世話になっている方々に大変よろこんでいただいているものに、カレンダー作りがあります。

これは、自然学習の中で計画的に作っています。３ヵ月まとめて、年４回作って配っています。１ヵ月・１枚に要する製作時間は８時間程度です。作業の手順は最初に全員で、その月の鳥を何にするかを決めます。次に数字は版画で野鳥はシルク印刷でと、それぞれ分担をきめ出来れば印刷にかかります。なかなか大変な作業です。しかし、その苦労も出来たカレンダーを見れば吹き飛んでしまいます。

また、毎年、春のバードウィークにはポスターをかき、啓もうにつとめるとともに愛鳥の心を養うようにしています。

(6)　野鳥観察発表会

自然時間を利用しての探鳥会や、登下校時などで観察した鳥について記録した観察ノートをもとにし、毎日、観察のようすをまとめています。

このように毎日続けて観察したことをもとに、毎年11月の下旬に野鳥観察発表会が行われます。発表形式は自由ですが、皆、それぞれ工夫して、わかりやすい発表に心がけています。図で表したり、鳥の習性をうまくとらえながら鳴き声などを発表しています。

この発表会には、お母さんたちも参加して熱心に聞いてくれます。また、町の文化祭に私たちの研究・観察の成果を発表し、少しでも多くの人たちに関心をもってもらい、愛鳥活動の輪を広げたいと思っています。

４、活動をふり返って

以上が私たちの愛鳥活動のあらましです。活動の一つひとつを振り返って見るとき、まだまだ努力しなければならない点がたくさんあることに気づき反省させられます。しかしその反面、わずかな仲間で、これだけよくやったという満足感もあります。これには、先生方や地域の方々のご理解や応援があったからだと思っています。

この活動をはじめてから、自然に対する目、とりわけ野鳥に対する目が変ってきたことも事実です。一つの例として、小鳥などになにげなく小石をぶつけて、いじわるしていたのが、不思議と誰一人として、その様な態度には出ません。むしろ、積極的に観察したり保護してあげたい気持ちになるのです。これも、自然学習のお陰と思っています。このことが愛鳥精神のあらわれではないかと思います。

このように、思いやりの心、やさしい心を持っていれば、今言われている非行、生徒の暴力などおこらないと思います。

私たちは心から愛鳥活動を続けてきたことに誇りを持っていますし、これからも続けたいと思います。今後も皆と相談して、先生や地域の方々の指導をいただきながら、無理のない計画のもとで、地道な愛鳥活動を続けていきたいと考えています。

林野庁長官賞
「学校林の野鳥生態調査について」

宮城県立小牛田農林高等学校・林業科クラブ

私達の学校は、県北の穀倉地帯大崎平野のほぼ中心に位置する小牛田町にあります。本校は町の北部にあって、1学年農業科4学級、林業科・農業土木科それぞれ1学級、定員720名の男子校です。

本校に学校林が創設されて74年になりますが、この間多くの先輩達が学校林に、いろいろの思い出をつくり巣立っていきました。

学校林は本校から約10km離れた所にあり、標高224mの加護坊山の南面中腹に位置しています。この学校林には針葉樹、広葉樹、針広混交林の70%に及ぶ人工林の他、100年以上の天然林もあって、多彩な樹種が生立しております。全山鳥獣保護区であり、野鳥の宝庫となっています。

学校林は日常の学習活動の場であり、「杜鵑寮」というホトトギスの名に因んだ宿泊施設を持ち、この寮を拠点としてオリエンテーション、移動ホームルーム、生徒会や農業クラブの指導者養成講習会、終日実習や宿泊実習に機能しています。さらに、子供会や小学校の林間学校、同級会や同窓会にも利用され、広く地域社会と密着した活動の場となっております。

「杜鵑寮」のすぐ近くのモミ林にはチゴハヤブサの巣があり、ノスリやフクロウ類もよく見かけます。これらの猛禽類の他、キツツキ類やウグイス、ホトトギスを始め、サンコウチョウなども生息しています。20年前の調査記録によると24科67種の生息が確認されています。

学校林における野鳥の生態調査については、次のような学年毎の目標を持って、20年来の継続調査活動をしております。

1年生の目標
①愛鳥思想の高揚
②巣箱コンクールの実施
③架設巣箱周辺の観察

2年生の目標
①食餌植物の植栽
②給餌台の設置
③野鳥の採餌観察

3年生の目標
①野鳥名鑑別力を高める
②探鳥会の実施
③生息調査のまとめ

1年生を中心にした巣箱コンクールは、野鳥に対する認識を高める効果も兼ねて、11月に行われる学校祭の行事の一つとして実施しています。材料は学校林内の間伐材を利用し、製材も自分達で行っています。形や大きさは各自の考えに基き製作しています。

架設数は毎年300個を維持しており、古くなった順に更新しています。巣箱の維持管理については、生態的バランスを考え300個が限度、という結論を得て今年が6年目になります。

1年生の架設巣箱の調査をみると、シジュウカラを主として、ムクドリ、コムクドリ、スズメ、ヤマガラの利用がほとんどで、過去5年間の平均は、67%の利用率となりました。

2年生の調査活動として、野鳥が1日にどれ程の虫を捕食するのかを調べたことがあります。1番のシジュウカラについて、繁殖期の1日を選んで観察をした結果、1日に1つの巣に325回餌を運んだことを確認しました。どんな餌かは未確認ですが、繁殖期、行動範囲がほぼ森林内ということから、森林昆虫であると推量できます。1日の虫を運ぶ回数から、虫の数となるともっと増加するし、さらに1年間の捕食する虫数を割り出すと万単位となります。このことから野鳥が益鳥と言われていることが納得できます。

さらに、野鳥誘致法として、農業基礎のさし木、取木実習により増殖したマサキ、ヒサカキ、タチバナモドキ、ウメモドキなどを寮の周囲に植栽しました。これらの植物は学校林内にも多くあるのですが、さらに野鳥の増殖と身近に観察できることを願いながら植栽しました。

また、給餌台は、学校林内の枯木や切り株を利用したものが多く、林内にあって違和感がなく、

自然に調和するように配慮しました。給餌は自然の餌が不足する冬期間だけ行い、雑穀類や果実類を定期的に給餌しています。実施については、学校林に常駐している管理人にお願いしております。この効果についてはあまり期待していなかったのですが、今年の冬は近年にない厳冬で、自然の餌が雪に埋もれたためか、予想以上の野鳥が集まりました。雑穀類にはスズメ、キジバト、ホオジロ類がよく見られ、果実類にはシジュウカラ、ツグミ、オナガなどが確認できました。

３年生は春の宿泊実習中の学習会で、スライドや録音テープによる野鳥鑑定会を実施しています。この鑑定会は、実習中に見たり、鳴き声を聞いたりする野鳥が多いため、興味深く学習に参加することができます。

さらに野鳥に親しむため、測量用の望遠鏡を利用したバードウォッチングを実施しています。ポケット図鑑を片手に学校林内を歩くことにより、私達が普段見ている種類より、ずっと多くの野鳥がいることを知り、新鮮な発見となりました。

春期、夏期実習中に確認した生息種は、留鳥、夏鳥、冬鳥合わせて23科60種になり、これは20年前の記録調査より１科７種減少したことになります。減少の原因としては、①調査の未熟さ。ということが考えられます。これについては、今後さらに研修を深めてから再調査したいと思います。

②周囲の環境の悪化。これは、例えば20年前に生息していたが、現在生息していないものとして、カワセミがいます。この鳥を取りまく環境の変化を考えてみると、20年前は学校林の近くに大きな沼があり、魚も多くいたと聞いております。この沼は現在干拓により、水田に変化しています。カワセミは餌場がなくなると同時にどこかに姿を消したと思われます。

私達はこのカワセミを何とか再び学校林内で姿を見たいと考え、昨年から餌場作りに取り組んでいます。学校林内には３つの沢があり、そのうちの一番大きな沢には２つの砂防ダムがあります。ここは初夏になるとカゲロウの大発生源となるので、この場所にヤマメの放流を試みました。沢はヤマメの常食餌となるカゲロウは十分いるのですが、山の標高が低いため夏場の水量が問題となってきます。今後の様子をみながら、ヤマメの放流を継続していきたいと考えています。そして、いつの日か、カワセミが沢辺を飛翔することを実現させたいと思います。

このように学年毎の目標に従って調査研究を続けていますが、未知の分野が多く、遠隔地でもあるので思うように調査研究が進みません。しかし、私達の活動が地域の人々の愛鳥思想の啓蒙にも役立つと考えますので、今後もこの活動を継続していきたいと思います。

今後の活動として

①生息種の継続調査

②野鳥誘致の継続

③探鳥用案内板の作成

④野鳥保護のＰＲ

以上のようなことを、林業科クラブ員全員の力により継続していくつもりです。さらに、地元の小・中学生や一般の人々にも広く、学校林内の野鳥に親しんでもらうために、野鳥観察路や探鳥用案内板の整備を計画していくつもりです。

今年は緑の国勢調査の年です。私達もこの調査に林業科クラブ挙げて取り組んでいますが、この調査をしてみて感じることは、道端に普通にある草花や小動物の存在する自然を保つことさえも、かなりの努力を要するということです。まして、一度失った自然を取り戻すことは、並大低の努力ではできないことを、カワセミの復活活動を通じて学びました。

私達は、かけがえのない自然を守るために、努力を惜しまない行動力のある人間に成長していきたいと思います。

日本鳥類保護連盟会長賞
「わたしたちの学校の自然教育活動と探鳥会」

愛知県犬山市立今井小学校

1、わたしたちの学校の自然教育活動

(1) 学校の地理的環境

本校は、愛知県の北西部、犬山市東部丘陵地帯にあり、四方を緑豊かな山に囲まれた静かな所にあります。そして、近くには、八曾自然休養林や東京大学演習林・パイロット農場があって、そこを東海自然歩道が通り、1年中多くの人が訪れます。

(2) 自然教育活動のあゆみ

この豊かな自然を生かした活動は、20年程前から続けられてきました。昭和43年には、「今井小学校鳥獣保護区」の設定と、「愛鳥モデル校」の指定を受け、昭和50年には、愛知県で最初の「今井みどりの少年団」が結成され、鳥獣保護活動とみどりの少年団活動とが一つになって、鳥獣保護活動・森林保護活動・野外活動・野外観察と、今では、学校全体の活動として、学校生活の中にとけこんでいると共に、地域ぐるみの活動へと広がっています。

その成果が、昭和52年度には、全国鳥獣保護実績発表大会で、環境庁長官賞を受賞し、昭和58年度には、全日本学校林活動コンクールで、準特選の賞を受け、恵まれた自然を通して、心や体をきたえ、心の豊かな人に育つことをねらいとして活動を続けています。

(3) 野鳥保護活動の内容

この自然教育活動の中の野鳥保護活動では、次のような4つに分けての働きをしています。

①自然を知る活動
　四季の探鳥会・野鳥教室・森林教室・野鳥の生態観察・樹木調べなど

②繁殖と採餌を助ける活動
　巣箱かけ・給餌活動・野鳥の手当てなど

③野鳥のすみよい環境づくりの活動
　実のなる木の植樹・鳥獣保護区の整備など

④人々への啓もう活動
　看板立て・森林パトロール・ポスターづくりなど

2、探鳥会

(1) 探鳥会の概要

野鳥保護活動の第一歩として、野鳥に親しみ、野鳥をよく知ることが、野鳥愛護の気持ちを育てるもとであると考えて続けています。

最初のうちは、年に1、2回行っていた程度でしたが、昭和50年度からは、四季の探鳥会として、年間を通して実施するようになり、今では、学校ぐるみで探鳥会をやるようになりました。

(2) 探鳥会のねらい

探鳥会は、主として鳥獣保護区とその近くの所で行っています。時には、八曾自然休養林の方へも出かけることがあります。

探鳥会当日に見られる野鳥を記録することを主な目的としていますが、この他に、四季それぞれに目あてをもっています。

春 ― 探鳥の仕方・野鳥のなわばりの学習
夏 ― わたり鳥・野鳥の鳴き声の特徴の学習
秋 ― 野鳥と食べ物との関係についての学習
冬 ― わたりについての学習と、給餌台水飲み場の掃除や補修をねらいとしています。

(3) 探鳥会の方法

4回とも、1年生から6年生までの全員が参加して行いました。日程としては、9時に学校を出発して、11時にもどるようにした2時間の探鳥と、それに続くまとめの時間となっています。記録は決められた用紙に見た鳥や鳴き声を聞いた鳥を書き込み、それをもとに全体のまとめをします。

このようにして、季節により探鳥会の目的をはっきりさせることによって、新しい気持ちで探鳥会に取り組むことができ、野鳥を調べることに積極的となり、自然を愛護する気持ちから、心のやさしい人に育っていくことにもなると思います。

(4) 四季の探鳥会に見られた野鳥

ア 春の探鳥会

春には、19種類の野鳥が見られました。

特に数が多かったのは、スズメ、ヒヨドリ、ツバメの3種類でした。ツバメは夏鳥の代表ともい

える鳥です。毎年、校下の全部の家を回って、ツバメの営巣調査をしています。巣の数が近ごろ減ってきていますので、少し心配しています。また以前は、コシアカツバメがよく飛んできた記録がありましたが、見ることができませんでした。

イ　夏の探鳥会

15種類の鳥が見られました。スズメやツバメは相変わらずたくさん見られました。夏鳥としても、ツバメ、アマサギ、サシバの３種類見られましたが、アマサギは、このごろよく見ることができるようになってきています。全体に暑さのためか、姿を見せるのは少なめでしたが、鳴き声はよく聞かれ、鳴き声の学習もよくできました。

ウ　秋の探鳥会

26種類と春や夏に比べて、たくさんの野鳥を見ることができました。スズメやムクドリなどは、群れで動くので、一度にたくさん見ることができました。また、家のカキの実をつついている姿も見ることができ、野鳥と食べ物との関係を知ることにも役立ちました。もう夏鳥は１羽も見られずその代わり、毎年やってくる冬鳥、カシラダカ、ジョウビタキ、ツグミ、ハクセキレイの４種類は全部見ることができました。

エ　冬の探鳥会

秋と同じぐらいの27種類見られました。昨年度の冬は、大変に雪が多かったので、給餌活動にも力を入れました。冬だけに見られたノスリ、ビンズイ、ヒガラ、アカハラの４種類の野鳥は漂鳥であることを知りました。今までの探鳥会で見たことのない野鳥でしたので、この寒さが関係しているのかと思いました。

(5)　探鳥会で学ぶ

わたしたちの学校では、カラスでは正解ではありません。必ず、ハシブトかハシボソがつかなければいけないのです。このように、探鳥会をすることにより、野鳥の種類や名前を正しく理解することもできるようになりました。

また、野鳥の生活の様子を知る上にも、大変に役立っていることも分かりました。例えば、年間を通して一番多く見られたスズメのように、行動範囲の狭い野鳥では、一つ所にすむことのできる野鳥の数が決まっていることとか、カラスのように行動範囲の広い野鳥は、大きな群れをつくっているということも勉強しました。

このように、わたしたちの学校のある場所は、大変に自然に恵まれています。わたしたちも、そのおかげで、自然からたくさんのことを学び、自然の大切さを感じてきました。

３、今後の自然教育活動

最後に、鳥獣保護活動を中心に、わたしたちのこれからの活動について発表します。

１つは、わたしたち一人ひとりが、もっと自然について知り、実際の場に役立つような知識を身につけたいということです。傷ついたり、病気になったりした野鳥や巣から落ちたヒナなどをよく見かけますが、こんな時、先生の指導によって、だれもが保護し、手当てをし、元気になるまで育てていくだけの力を持ちたいと思います。

２つめは、自然教育活動全体をもう一度見直すということです。学校生活の中で、ごく普通の活動として、更に深めていきたいものです。すでに、探鳥会は、わたしたちにとってごく普通の活動としてすすめられています。

３つめは、わたしたちの自然保護についての考えを、更に広めていくことです。新しい手だてを加えながら、自然保護を、そして、人と自然とが仲良くできる環境を守ることを強く訴えていきたいと思います。

わたしたちの力でできることは、小さなことです。しかし、同じ考えを持つ人が増えれば増えるほど、人にとっても、自然にとっても幸せなことと思います。そのためにも、わたしたちは、がんばり続けたいと思います。

環境庁自然保護局長賞
「『龍王山に学ぶ』緑の少年団活動」

福岡県飯塚市立八木山小学校

はじめに

最近の科学技術・情報化社会の進展は目をみはるものがあり、自然破壊や環境のアンバランス化を促進しているのではなかろうか。またその進展は今の子どもたちの生活の仕方・考え方に少なからず影響を与えている。これからを背おって立つ子どもたちは知識・技能を身につけることも大切であるが、それ以上にかけがえのない地球を守るための社会人としての心豊かな人間の育成が急務ではなかろうか。

1、本校区の環境と「緑の少年団」活動の経過

(1) 本校をとりまく環境

本校は、福岡県のほぼ中央にある嘉穂盆地の中心地飯塚市西部の丘陵地にある。南に龍王山(615.6m)と北に高坪山(512.3m)の間にはさまれたミニ盆地で東西に八木山川が流れ、それに沿って福岡市に通じる国道が通っている。昔は藩の狩猟地でもあったとおり、県でも有数の鳥獣・昆虫類の生息地であり、現在でも鳥類140 種を数えられるといわれていて緑のすばらしい集落である。

(2) 本校の「緑の少年団」活動の経過

本校では、この丘陵地を含めた山郡山地が昭和55年に鳥獣保護区に指定されることと「緑の少年団」の活動のねらいをふまえ農山村特有の子どもたちの欠点を解消していく指導に最もよいということから昭和54年4月に入団をした。

1つは校区内や校内をいつも美しくを目標に、花壇の世話、登山道の清掃や道しるべ立てと修理、花いっぱい運動への参加、学校の田畑での田植え稲刈り、さつま芋の世話と収穫、全校会食会などの校内外の美化など、地域の清掃を子どもたちのふれ合いを通しながら活動を進めてきた。

2つ目は、八木山地区の野鳥や昆虫・植物をよく観察し、生命の大切さを知ろうを目標に、愛鳥活動を続けながら、昆虫や植物の生息調査などを続けてきた。愛鳥活動では5・6年が中心になり、学校行事やゆとりの時間を活用して、学校独自の探鳥会(遠足会年3回)の実施、また筑豊探鳥会にも自主参加をした。学校では校庭に餌場を3ヵ所裏山に2ヵ所設置して、給餌活動を行ってきた。その外、巣箱作りと裏山への取りつけ観察を続けてきた。昨年は餌場のシジュウカラの観察を、4月上旬から5月下旬までの2ヵ月間観察記録し、県の「緑の少年団」実践交流会で発表、また地区関紙「筑豊博物誌」に掲載された。

2、本年度からの「緑の少年団」活動のとりくみ

(1)活動の位置づけ

本年度からは高学年の「ゆとりの時間」の2時間だけを毎週土曜日まとめ、低学年も2時間はオーバーになるが全校的に「緑の少年団活動」を実施することにした。従って、土曜日1校時は学級会や全校集会の時間とし、2校時・3校時を活動の時間とした。このため土曜日は「ノーカバンデー」の日としている。

(2)活動のねらい

ア　地区の自然に多くふれ、自然を守り生き物の命を大事にしよう。

イ　友達や地区の人たちとのふれ合いを多くし活動に協力してもらおう。

ウ　心や体をきたえ「緑の少年団」としての規律ある行動をしよう。

(3)活動の組織

全校児童（50名）を活動内容によって3つの型で活動している。

○A型＝1学年または近接学年で活動する
———6または3班

○B型＝各地区子ども会別で活動する
———5班編成

○C型＝1年～6年生を縦割（12名～13名）
———4班編成

(4)活動の実際

ア　自然に学び自然を守る活動

○　自然に学ぶ活動

学校のまわりや龍王山麓に足をはこび、春・夏・秋の3回野山の草花を観察する活動をし、図鑑を持って上級生の指導を受けるC型である。また

遠足会（学校行事）を含め春・冬の野鳥の観察をする（C型）。2人に1つの双眼鏡をもって時には野鳥の会の指導を受けながら観察をする。年2回「福岡県の野鳥」「野鳥の巣箱作り」の映画を見て野鳥の会の方から野鳥のことについて話を聞く活動（A型）もしている。

○　自然を守る活動

5月から6月にかけては、学校田や畑に稲やさつまいもを植え（A型またはC型）世話をしながら秋の収穫まで活動している。また1人1鉢運動や市花の〝コスモスいっぱい運動〟に参加し優秀賞を受けた。7月は河川愛護月間であることから「八木山川をきれいにしよう」という子どもたちの呼びかけで、遠賀川工事事務所の方から川の大切さの話を聞いたあと、地区の親たちと一緒に（B型）上流・下流へと川の清掃をした。遠足会の時には各班ビニール袋を持参、道路や山道のゴミを拾う活動を行っている。12月以降は、冬休み期間もふくめて野鳥の巣箱作りを、C型で親と子で製作し1月に学校の裏山にとりつける予定である。また校内の餌場の修理と増設も計画している。

イ　友達や地域の人たちとのふれ合う活動

5月・6月・9月には、母の日・父の日・敬老の日があるが、お母さん・お父さん・祖父母や近所の老人に感謝の気持ちを表わして、似顔絵や手紙を送って（B型）大変喜ばれたくさんのお礼の返事をもらった。秋祭りには、親やおじいさんおばあさん達を招待して、この地区の伝統である相撲大会をして喜ばれた。また校内児童だけで「龍王山でリクレーション」（C型）「秋の龍王山を絵に描こう」（A型）「野外炊飯で全校会食をしよう」（C型）これは今年学校田で収穫した米を使ってのふれ合い会食を実施した。また今年は近接校の障害児学級の子ども8名を、学校畑のさつまいも堀りに招待して、ふれ合う活動をすることにしている。七夕祭（A型）豆まき（A型）のふれ合い活動も実施する予定である。3月の6年生が卒業する前には「緑の少年団おわかれ会食会」（C型）も予定している。冬季にはいってからのふれ合い活動では、野鳥の好きな実のなる樹木を地区の方々に呼びかけて校庭に植えることも予定している。

ウ　心や体をきたえ規律ある行動をする活動

この活動は「緑の少年団」活動の全部にあてはまることであるが、活動をするのにはないがしろにしてはならないことである。年間計画に変化をもたせるため、教科体育の時間の延長として、学期1回程度の体力づくり活動を配置した。1学期は、プールで泳ごう（プール開き）、2学期　相撲大会・マラソン大会、3学期　なわとび大会（全部A型）で活動している。体力づくりといえば、探鳥会・観察会・リクレーション等も、その活動といえるが、すべてに規律を守る活動でなければならない。

3、今後のとりくみについて

「ゆとりの時間」を土曜に集中して年約35週の実施が可能であるが、「緑の少年団」活動ということで、団活動のねらいにそうよう計画を組んでみると総花的な活動になったようである。今後は、大きな目標である、自然を観察し、緑を守り育てる活動に重点をおき活動すべきではないか、この1年次計画のみなおしが必要であろう。また地域の方々への啓蒙と協力で、地域ぐるみの活動へ発展するよう努力したい。

おわりに

「緑の少年団」活動を通して、情緒の豊かな子どもであり生命尊重の精神を深く考えることができ、主体的自主的に行動できる子どもが育つことを願ってやまない。

環境庁自然保護局長賞
「自然保護と私たち」

高知県宿毛市・愛媛県南宇和郡一本松町篠山小中学校組合立篠山中学校

私達の学校には日本一のものがあります。それは、紹介されている校名です。組合立という所に「オヤッ」と思われた方もあるかもしれませんが、正式の校名は、「高知県宿毛市・愛媛県宇和郡一本松町篠山小中学校組合立篠山中学校」といいます。31字に及ぶ、長い名前です。当然のことですが、高知・愛媛両県から生徒も通学しています。学校は四国の西南部、足摺：宇和海国立公園の中に含まれている篠山のふもとにあります。

仲間は全員で22名。わずかな生徒数です。部活は、男女ともテニス部。特に去年は、個人で四国一となり全国大会に出場し、私達も後に続こう、とがんばっています。生徒数が100名をこえていたころは、いろいろな部もあったそうですが、過疎化が進んだ現在では、団体戦に出場するのも大変な状態です。通学してくる途中には、荒れ果てた家や田んぼもありますが、残っている者が力を合わせて、住みよい村にしようと一生懸命に働き、また学んでいます。

人数が少なくて、行事をするときなんか大変だろうと思われるでしょうが、そこは若さと根性でがんばっています。生徒会活動も、一人一役でやりくりしています。

私達の生徒会で自慢できるものは、あまりありませんが、「緑の少年隊」は、ユニークな活動だと思っています。これは緑を愛し育てる活動を通じて、郷土を愛し、自然に親しむ心豊かな青少年の養成をめざそうというもので、全国的な規模で結成されているものです。私達の学校でも、昭和53年から、となりの篠山小学校と一緒にこの運動に参加し活動しています。現在の隊員は37名で、小学校4年生から中学校2年生までです。緑の少年隊の活動の中で、一番重要な位置を占めているのは、「巣箱かけ」です。製材所から買ってきた板を、技術や工作、ゆとりの時間などを利用して巣箱をつくり、学校林や近くの雑木林にかけつづけています。巣箱をかけにゆくと、先輩が取り付けた巣箱もよく見うけられるようになってきました。

秋になったら巣箱の調査にゆきます。木にのぼる時はとてもわくわくします。巣箱の中に木の葉やコケなどで、かわいい小鳥の巣が作られているのを見つけると、皆「やった、やった」と飛び上がって喜びます。しかし全部がそのようなわけにはゆきません。自分のかけた巣箱がそのままの姿だった時は，とても淋しくなります。入り口が小さかったのかくちばしでつついて広げてあったり、スズメバチの巣ができているのまであったりして、びっくりすることもあります。このような私達の期待に反する巣箱があることで、「ただ巣箱を作ってかけるだけではいけない。篠山にいる小鳥達のいろいろな習性や特徴を学び、その小鳥達にあった巣箱を作ってやらなければいけないんだ」ということも、改めてわかりました。そのため、少しずつですが、巣箱に改良を加えて、「鳥のすみか」ということを念頭に作るようになりました。小鳥達がとまりやすいように、入り口に止まり木をつけてみました。箱や入り口の大きさもいろいろ変えて、どのくらいの大きさがよいのか今年はためしてみようとも計画しています。また、今までは針金を使って木にしばりつけていたのですが、針金は木が大きくなってくると、幹にくいこんで傷をつけてしまうのでかわりに、藤づるや荷づくり用のテープなどで、くくりつけるようにしています。また、大きな竹を2節ずつ輪切りにし、片方の節を切り抜いて作るだけの、本当に簡単な巣箱でも気に入ってくれるようです。

最近、私達は春先から夏の間にかけて、巣箱をかけにゆきませんし、近づくこともしないようにしています。なぜかというと、小鳥にとってこの季節は、巣作りや、子育ての真っ最中なので、そっとしておいてやる方がいいと、先生に言われたからなのですが、私達が巣箱をかけにゆくのが1月から2月で本当に正しいのかどうか、今日はぜひ確かめて帰りたいと思います。

その他の活動としては、森林愛護表示板を林道わきにかけて、山火事の防止を呼びかけたり、学

校林の下刈り、またボランティア活動と一緒になりますが、カーブミラーの清掃や、空きカン拾いなど行っています。

今年行った活動の中で特色のあるものは、3月に行われた「植樹祭への参加」と、4月から継続して調査中である、「緑の国勢調査」に、全校で取り組んでいることです。

まず、植樹祭ですが、これは宿毛営林署と一本松町が実施されたものに参加させていただきました。町の公園予定地に桜の苗木を植えたのです。急な斜面をころげ落ちそうになりながら、植えた木が大きく育ってゆくのを楽しみにしています。淡いピンクの桜の花が、一日でも早く開くことを、私達は心から望んでいます。

「緑の国勢調査」は4月ごろ、学校の方に環境庁より依頼されて、研究することになりました。先生から今年の野外学習のテーマとしてどうだろうか、と生徒会に相談されました。話し合った結果、身近な動植物を知るよい機会でもあるし、私達の調査が少しでも役に立つのならやってみよう、ということになりました。調査活動の時間としては、篠山タイムなどを利用して、毎年実施している移動教室をあてることにしました。5月から6月にかけて、各班ごとに計画を立て、実施調査・研究、そして発表会を持ちました。実地調査は文字どおり、実際に足でまわりました。山あいの部落を歩いたり、谷を登り、川岸を探しているうちに、私達が見過ごしていた、いろいろなものを発見しました。それは、動植物だけでなく、私達の祖先のつくった石の橋や小さなほこら、山の中の石垣などでした。発表会で、各班が探してきた種類をあわせると、かなりたくさんのものがみつかって、「こんな植物も、ここにはあったのか―」「この動物は、こんな特徴を持っていたのか―」と、あらたに教えられました。環境庁発行の「調査のてびき」を中心に家の付近を探してみるのも楽しいものです。

この発表会の後でも、引き続き調査研究に取り組んでいます。そして12月の終わりまでには、できるだけ多くの動植物を見付け出そうと、皆はりきっています。でも、中にはザリガニや、セイタカアワダチソウのように、見つからないほうがいいものも、あるようですね。

今まで述べてきました「緑の少年隊」にしても、「移動教室」にしましても、最初から鳥獣保護を目的として始められたのではありません。でも、さまざまな活動を通して、どれも自然をよく知らなければ、できないことであり、そうすることが、動植物を愛護することに、つながっているのだ、とわかりました。それが自然保護への大きな力の源になるのではないでしょうか。私達は自然と深く接触する中で、私達と同じ地球に生存している動植物を愛することが、できるようになりました。そして、それらとのかかわり合いの中で、生活を営んできた私達の祖先の生きざまそんなものを切実に感じとることができました。私達はいつでも、自然から恩恵を与えてもらい生活しています。いわば、自然あっての私達なのです。神様は、私達人間に、ありあまるほどの豊かな自然を与えて下さいました。これをどう利用するかは、私達人間一人一人の手にかかっているのです。

私はここに誓います。日本の産業が発達し近代化の進む今、私達の郷土である篠山を、心のいこいの場として守り通すことを。そうすることが、私達を今まで見守ってきてくれた自然に対する感謝の気持ちであるからです。

私達は、今日の栄誉を大切な宝とし、より一層自然愛護と育成に学校ぐるみ、いや篠山全体で取り組んでゆくことを誓います。シカやリスが走りカワセミが羽を光らせる、美しいふるさとを守ってゆけるのは、私達自身にかかっているのですから。

日本鳥類保護連盟会長褒状
「私達の愛鳥活動」

茨城県新治郡桜村立竹園東小学校

私達の竹園東小学校は、筑波研究学園都市のほぼ中央にあり、自然環境にたいへんめぐまれた地域に位置しています。学校のまわりには、公園や池や川があり、その公園には、キジバト、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、オナガ、キジ、メジロなど14種類にも及ぶ野鳥がいます。もちろん、学校内でも数多くの野鳥が観察できます。

竹園東小学校が、愛鳥モデル校として指定を受けたのは昭和56年で、全校をあげての愛鳥活動が本格的に始まりました。活動のねらいとして「自分たちのまわりにすんでいる野鳥の観察を通して、野鳥を愛する心を育てよう」と「明るく思いやりのある心をもって野鳥に接し、保護できるような態度を育てよう」という２つの目標をかかげました。自然観察クラブが中心となり、これまでに行ってきた活動について発表します。

１、野鳥のための環境づくり

愛鳥活動の手始めとして、もっと野鳥のすみやすい環境をつくろうと考えました。そこでまず、巣箱作りをしようということになり、先生方やクラブ員のみんなでとりかかりました。作る前に、小鳥の大きさやかける場所や材料などについて話し合いました。そして、木の板を使って、小鳥の好きそうな巣箱を学校内に15個所設置しました。特に、校舎の近くにある松林には、小鳥がたくさん集まるので、『竹園小鳥の森』という名前をつけて、木の看板を掲示しました。そこには、巣箱もたくさんとりつけて、全校のみんなにも積極的に野鳥の観察を呼びかけました。

その後、学校周辺の公園にも15個の巣箱をとりつけ、クラブ活動の時に観察したりしました。低学年棟の近くにある巣箱を見て、１年生のＡ子さんは「あの巣箱には、どんな鳥が入るの」と担任の先生にたずねました。

「どんな小鳥が来るのかいっしょに観察してみよう」と先生がおっしゃって、Ａ子さんと先生は、注意深く巣箱に来る鳥を見ていました。ある日、その巣箱にスズメの入るのを見たとき「あっ、スズメ、スズメが入った」とＡ子さんは、大声でさけびました。このように、巣箱は、低学年の子にとっても興味深いものだったようです。

次に、給餌台を作ることになりました。小鳥が餌を食べるのにちょうどよい高さを考え、『竹園小鳥の森』と低学年棟の近くに１個ずつ取り付けました。給食の残りのパンを小さくちぎってのせておくと、たくさんの小鳥が集まってきて、きれいにたいらげていきます。巣箱や給餌台は、時々、修理したりそうじしたりします。野鳥のためにできるだけ、すみよい環境をつくる工夫をみんなで心がけているのです。

２、野鳥観察

週１回のクラブ活動の時、自然観察クラブの野鳥グループは、野鳥観察に出かけます。場所は、学校近くの公園や花室川周辺に行きます。花室川の近くまで行くとコサギ、ヒヨドリ、キジバト、ムクドリ、オナガ、ホオジロ、スズメ、ハシブトガラス、ドバト、カワラヒワ、モズ、ヒバリなど、思ったよりたくさんの鳥を見ることができました。

観察の記録は、野鳥観察カードに書きます。これは、低学年用と高学年用に分けてあり、観察日、天気、観察時間、観察場所、鳥の数、観察したことなどが、記入できるようになっています。

また、個人の野鳥観察も全校の一人一人がやっています。低学年の子供は、スズメなど身近に見られる鳥の観察をしているようです。自分の家の近くに来る鳥の観察を、これからも続けてほしいと思います。

３、愛鳥集会について

昭和57年度より、毎年、愛鳥週間のすぐ後に全校のみんなで、愛鳥集会を行っています。集会前には、全校のみんなで愛鳥ポスターをかき、体育館に一斉にはります。

また、『学級の鳥』を決めて、もぞう紙にその絵をかき、簡単な鳥の特徴をつけます。これも、体育館のステージの後ろ壁に全クラス分を掲示します。各クラスともいろいろな鳥を決めるので、

壁にはった鳥の絵を見ているだけで楽しくなります。低学年ではスズメやツバメなどが多く、高学年になると、ハヤブサとかワシなどがあります。

それから『自分の鳥』を決めます。これは全校の一人一人が、自分の好きな鳥で観察したい鳥を1つ決めます。そして集会の時に、ベストテンを発表します。ことしの愛鳥集会の『自分の鳥ベストテン』の結果は、1位ツバメ（98人）、2位スズメ（83人）、3位ウグイス（82人）、4位インコ（48人）、5位ヒバリ（31人）、6位メジロ(26人)、7位ハトとタカ（24人）、8位ハヤブサ（23人）、9位ワシ（22人）、10位カワセミ（19人）でした。この結果からわかるように、自分の身近にいる鳥に人気があるようです。

それから集会の時に、自然観察クラブの野鳥グループの発表があります。クラブでは、野鳥の生態地図を作ったり、手作りの野鳥観察図鑑、野鳥の食物による分布図などを作ったりしています。それらをもとに研究の発表をします。

また、集会の中には、『鳴き声コンクール』というものがあります。これは、学年の代表を2名ずつ選び、鳥の鳴き声のまねをします。児童会やクラブ員の人達が審査して、上手な人には、賞状をあげます。カラスやスズメやウグイスなど、いろいろな鳴き声を聞かせてくれました。なかには本物そっくりな鳴き声をする人もいるので、びっくりしました。

それから、『鳴き声当てクイズ』もします。これは、野鳥の声の録音テープを流し、鳥の名前をみんなに当ててもらいます。集会前の一週間、お昼の放送の時に、いろいろな野鳥の声のテープを流しているので、低学年の子でもクイズの答えを当てることができます。このようにして、楽しい愛鳥集会が行われています。

4、野鳥コーナーの設置

愛鳥集会の時に決めた『学級の鳥』は、各クラスにパネル写真にして掲示しました。その他に、理科室の前に野鳥コーナーをつくりました。これは、全校のみんなにもっと野鳥について知ってもらおうというねらいで、『竹園小鳥の森に来る鳥』と『学園都市周辺に来る鳥』をパネル写真にして掲示しました。全部で30種近くの野鳥の写真があります。また野鳥観察カードも置いてあります。

終わりに

竹園東小学校では、これまで発表してきたような愛鳥活動を行っていますが、まだまだ活動範囲を広げる必要があると思います。例えば、愛鳥活動の年間の計画をもっと詳しく立て、自然観察クラブだけでなく、愛鳥委員会などをつくりたいと思います。

また、巣箱や給餌台も修理したり、巣箱の穴の直径によって利用する鳥がちがうということなので、これから巣箱をかける時には、それをちゃんと守ってその野鳥に合うものを作りたいと思っています。そして、もっと野鳥が生活しやすい環境作りをしていこう、と考えています。私たちの手で、鳥が巣を作る場所や食べ物などを保護してやらなければなりません。

でも最近は、科学博などのために、大きな森がいくつかなくなっているので、たいへん自然がこわされてきています。だから、せめて私たち一人一人が野鳥保護の心をもって、小鳥に接するようにしなければならないと思っています。

日本鳥類保護連盟会長褒状
「地域に根ざす自然愛護の活動」

山形県米沢市立三沢東部小学校

本校は米沢市の南西に位置し、広大な山系に囲まれ、吾妻山系に源を発する大樽川、綱木川、太田川の三清流の流れるすばらしい自然に恵まれた教育環境にあります。また小野小町ゆかりの地小野川温泉を校区に持つ学校としても知られており、現在123名（内分校生３名）の児童が学んでおります。

本校では小規模校の利を生かし、〝ふるさと班〟と称する、学年・性別をオープンにした縦わり班の活動を続けています。昭和49年、当初遊びの指導の方策としてつくられたものが、その後特別活動の中に正式に位置づけられ、ふるさと学習、勤労生産学習、児童会行事等の主たる活動母体となって来ており、近年、児童の学校行事への積極的参加も見られ、非常な盛り上がりを見せています。

昭和58年度、愛鳥モデル校の指定と合わせて、米沢市民憲章推進校の指定も受け、児童の自主的かつ主体的な活動を期待し、児童会に推進的役割をもたせ、活動中です。

本校教育目標との関連

本校では、「自分の考えをもち、進んで学習する子ども」、「明るく思いやりのある子ども」、「健康でねばり強い子ども」という知・徳・体の３つの目標の具現化を校内研究テーマに掲げ、昭和53年からその研究に取り組み続けて来ました。今年度、古い歴史をもち、豊かな自然に恵まれた自分たちのふるさとをもっと大事にする子どもの育成を強化する考えから、新たに「自然に親しみ、郷土を愛する子ども」という目標を設けて、その具現化に努力しています。愛鳥活動もその一分野を占め、目標に迫ろうとしています。

ねらい達成のための年次計画

第１年次（昭和58年度）　― 野鳥を知る活動 ―
・野鳥学習　・野鳥観察　・巣箱かけ他
第２年次（昭和59年度）― 野鳥と仲よくなる活動
(1)―・野鳥観察　・探鳥会　・巣箱かけ他
第３年次（昭和60年度）― 野鳥と仲よくなる活動
(2)―・野鳥観察　・親子探鳥会　・巣箱かけ他
第４年次（昭和61年度）― 野鳥と仲よくなる活動
(3)―・地域への啓蒙活動　・三沢地区野鳥生態写真集の作成他

愛鳥活動の実際

愛鳥委員会の活動

昭和58年度に愛鳥モデル校の指定を受け、その活動の母体をふるさと班に置いたことは前述の通りですが、組織的・計画的・総合的に活動を推進させるため、児童会の組織の中に愛鳥委員会を新設しました。愛鳥委員会は、４年生以上の児童６～７名で構成され、小さな組織ではありますが、全校生への啓蒙活動、ふるさと班愛鳥活動への協力、そして自らの計画する愛鳥活動を行っています。

（主な活動例）

- 季節に合わせてポスターを描いて掲示したり、『愛鳥だより』を発行したり、あるいは昼の校内放送で、三沢地区に生息する野鳥の紹介や山形県愛鳥作文コンクールに出品して入賞した友だちの作文を朗読したりして、全校生への愛鳥精神の啓蒙に努めています。
- 学習会では、野鳥に大変詳しく、永く愛鳥活動を実践している分校の先生を講師に迎えて、「鳥のお話を聞く会」を毎年１回設けています。
- 技術員のおじさんの協力も仰いで、餌台や巣箱をつくり、野鳥の観察を続けるとともに、ヒナが巣立って空になった巣箱を取りはずし、分解して、巣のつくりなども学習しました。
- 校内愛鳥コンクール（ポスター部門、作文部門、バードカービング部門、巣箱などの工作部門）では、先生方に審査をお願いし全校朝会で入賞者の表彰を行いました。

ふるさと班の活動

ふるさと班は、現在「遊び」「ふるさと学習」「勤労生産学習」「児童会行事」「班独自の活動」それに「愛鳥活動」を加えて、それぞれ班の中で話し合い、年間の活動計画の中に組み入れられています。

（主な活動例）

- ふるさと班発表会において、ふるさと学習の一環として、野鳥のことや自分たちの郷土について調べたことを、クイズや寸劇にしたり、あるいは表にまとめたものを発表したりして、楽しい会をもっています。
- 巣箱をつくり、校地内の樹木や近くの山林の樹木にかけました。昨年度かけた15個の巣箱のうち、11個に巣をつくりましたが、ほとんどがスズメで一部ヤマガラとシジュウカラのものがありました。これは巣箱の穴の大きさやかける高さと関係するものと考え、今後改良していろいろな野鳥を呼ぶ計画を立てています。

その他の委員会の活動

- 広報委員会では毎朝のモーニング・メロディーの始まりに、保健委員会では清掃時のＢＧＭに、野鳥の鳴き声を巧みに編集して全校に放送し、野鳥が常に身近に感じられるようにしています。
- 図書委員会では、野鳥に関する本の紹介を行い、全校生に野鳥に対する興味や関心それに知識も合わせてもたせるようにしています。

その他の本校と愛鳥・自然愛護活動

- 昨年度の卒業生15名が、全員で卒業記念製作としてバードカービングに取り組み、作品を学校に残していってくれました。
- 分校の愛鳥活動は、10年前から始められており、数々のすぐれた研究実績があります。分校の職員室には、昨年から１組のツバメが巣をつくっており、今年は７羽のヒナが巣立ちました。５羽以上のツバメの巣立ちは大変めずらしく、その様子をＶＴＲに録画し、生きた教材にと編集に取り組んでいます。

毎月１回、全校生が一斉に下校し、通学路のゴミ拾いを行い、自然環境の浄化に努めています。

愛鳥活動に取り組んで

愛鳥モデル校の指定を受けたばかりの頃は、巣から小鳥の卵を持ってきては、何の卵かを尋ねる子どもがいてあわてて巣に戻させたことや、教室に迷い込んだ野鳥をつかまえて、鳥も自分たちと同じく体が温かいことや心臓が動いていることにおどろきと発見の喜びを味わった子どもたちもおりました。こうした野鳥への関心の芽生えの時期から、今では巣箱をつくったりポスターや作文をかいて掲示したりすることによって、そっと遠くから観察して楽しむ子どもに変わって来ています。また近くから野鳥の死体を見つけて来ては、学校の空地に墓をつくり葬っているグループがこれまでいくつか見られました。

そして何よりも、愛鳥委員会の主催する校内愛鳥コンクールには、全校生が自由に出品することになっていますが、昨年に比べて今年の方が、出品数、内容共にかなり充実したものになっており、愛鳥活動への関心が高まってきているものと考えています。

今後の展望

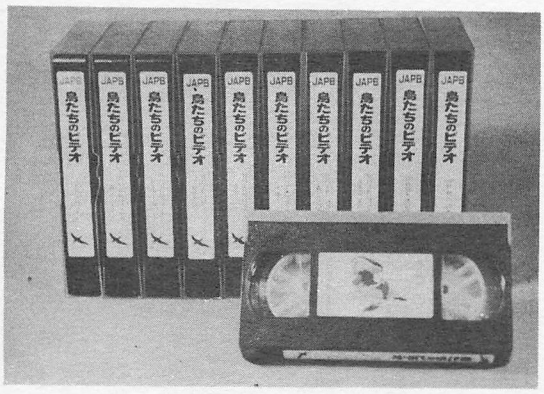
子どもたちは、ようやく自然というものに関心が向き始め、きれいな草花を摘み取って来たり、小動物を見つけては飼育したりしていますが、こうした自然への芽生えの段階から一歩進んで、自然のものはそのままそっとして観察・観賞することが一番よいことがわかり、自然を大切に守って行こうとする子ども、更には、開発か自然保護かという難しい問題に遭遇しても、自力で対処できるような子どもに成長して欲しいと願いながら、この愛鳥活動を続けていくつもりでいます。

また合わせて、地域への啓蒙活動も一層進めていかなければならないと考えています。現在は、ＰＴＡの段階で留まっていますが、いずれ三沢全域に浸透させていく計画でいます。幸いにも当地域は、自然を大切にする風土の強い所であり、愛鳥の精神・自然愛護の精神が、広く着実に浸透していくものと思われます。

日本の鳥がビデオになって飛んでくる

JAPB鳥たちのビデオ

JAPB field shop



日本鳥類保護連盟では、愛鳥教育普及のため、さまざまな活動を行なっていますが、その一環として鳥たちのビデオ(全10巻、各巻30分)を企画、制作しました。

鳥たちのビデオは、魅力的な鳥たちの世界を、美しい映像を用いて、鳥の見付け方、見分け方、聞き方などを、わかりやすく解説しながら、バードウォッチングに役立つ〝ＨＯＷ　ＴＯ〟を紹介していきます。

各巻のご紹介

No. 1　野鳥と仲よく
鳥と人間との暖かい交流のようすとともに、身近な野鳥と仲よくする方法を楽しく紹介します。
（スズガモ、ツバメ、オナガ、カワラヒワ、チョウゲンボウ、キジバト、セグロセキレイなど19種）

No. 2　バードウォッチング―森①―
春の森を訪ね、彩り鮮やかな低山帯の鳥の見分け・聞き分けのポイントを紹介します。
（センダイムシクイ、ビンズイ、ブッポウソウ、イカル、ウソ、ヒガラ、コガラ、ヤマガラなど25種）

No. 3　バードウォッチング―水辺①―
水際で忙しく餌をさがす鳥たちなど、川の上流から河口まで、水辺の鳥の見つけ方を紹介します。
（カワガラス、キセキレイ、ササゴイ、ユリカモメ、シロチドリ、イソシギ、タカブシギなど23種）

No. 4　バードウォッチング―草原・湿原―
ヒナを育てたり、歌ったり、広々とした草原で暮らす鳥たちのさがし方、観察の仕方を紹介します。
（キジ、ヒバリ、ホオジロ、ホオアカ、ノビタキ、シマアオジ、オオジュリン、コヨシキリなど20種）

No. 5　バードウォッチング―海―
絶海の孤島に集団で生活するなど、海で見かける鳥たちの暮らしぶり、見分けのポイントを紹介します。
（ウミウ、オオセグロカモメ、ムナグロ、ダイゼン、カツオドリ、ハマシギ、ダイシャクシギなど25種）

No. 6　バードウォッチング―人里―
町中の公園や木立などで、日常よく見かける鳥たちの行動の特徴、接し方を紹介します。
（ヒレンジャク、ジョウビタキ、ムクドリ、モズ、ハシボソガラス、カササギ、シラコバトなど20種）

No. 7　バードウォッチング―森②―
深い森で暮らすイヌワシ、南の島だけにすむカンムリワシ、森の鳥の見分け方紹介の第２弾です。
（アカゲラ、クマゲラ、コゲラ、エナガ、イヌワシ、サシバ、アオバズク、アカハラなど22種）

No. 8　バードウォッチング―水辺②―
冬の水辺に群れるハクチョウ、湖や池でヒナを育てるカイツブリなど、水辺の鳥の見分け方の第２弾です。
（オオハクチョウ、コハクチョウ、オナガガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、コガモ、バンなど20種）

No. 9　特別天然記念物
生息地が限られている貴重な鳥、特別天然記念物の鳥たちの生活を紹介していきます。
（タンチョウ、ナベヅル、マナヅル、ライチョウ、コウノトリ、ノグチゲラ、カンムリワシなど12種）

No.10　野鳥の四季
求愛、子育て、渡り、季節と深く結びついた鳥たちの暮らしぶりを美しい日本の風景の中で紹介します。
（メジロ、エナガ、キビタキ、ヨシゴイ、コサギ、オオソリハシシギ、カツオドリ、サシバなど30種）

●ビデオのお申し込み

- お手持ちのテープをご送付の場合は、コピー手数料のみで各１巻3,800円（送料共）。
- テープもご希望の方はテープ代金を加えてお申し込みください。
  ①ＶＨＳ方式（30分）　定価2,400円→2,000円
  ②ベータⅡ方式（30分）定価2,100円→1,800円
- お申し込みの際は、テープもご希望の方はＶＨＳかベータⅡかを明記してください。